長崎県文化財調査報告書　第151集

県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅱ

1999

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書　第151集

県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅱ

・岳　崎　古　墳（田　平　町）
・山の寺梶木遺跡（深　江　町）

1 9 9 9

長 崎 県 教 育 委 員 会

発刊にあたって

長崎県には数多くの貴重な文化財がありますが，これらの文化財を守るため，本県といたしましても日々努力しているところでございます。その一端といたしまして，平成８年度から実施しております主要遺跡内容確認調査事業は，埋蔵文化財に対する保護の理念や啓発を目的としたものです。今回，ここに報告する遺跡は，田平町の岳崎古墳と，深江町の山の寺梶木遺跡ですが，両遺跡とも長崎県における重要な遺跡の一つに数えられております。岳崎古墳は，長崎県でも数少ない前方後円墳ですが，今回の調査により，その規模等を確認することができ，九州の縄文晩期を代表する山の寺梶木遺跡では，その範囲を特定することができるなどの成果がありました。

このような地道な活動が長崎県の歴史を正しく認識するうえで重要な役割を果たすものと理解し，今後もこれらの遺跡の活用に努めていきたいと思います。

この事業を通して，県民の皆様に埋蔵文化財の保護・顕彰の必要性を御理解いただき，本報告につきましても，積極的に活用していただければ幸いです。

平成11年３月

長崎県教育委員会教育長

出　口　啓二郎

例　　言

1．本書は長崎県教育委員会が平成８年度から実施している県内主要遺跡内容確認調査の結果報告である。

2．本書には，平成９年度調査をおこなった岳崎古墳（北松浦郡田平町），山の寺梶木遺跡（南高来郡深江町）の結果報告を収録した。

3．本書では各遺跡については分担執筆した。それぞれの遺跡については執筆者は，以下のとおりである。

岳崎古墳	藤田和裕
山の寺梶木遺跡	福田一志

4．詳細は各項の例言を参照されたい。

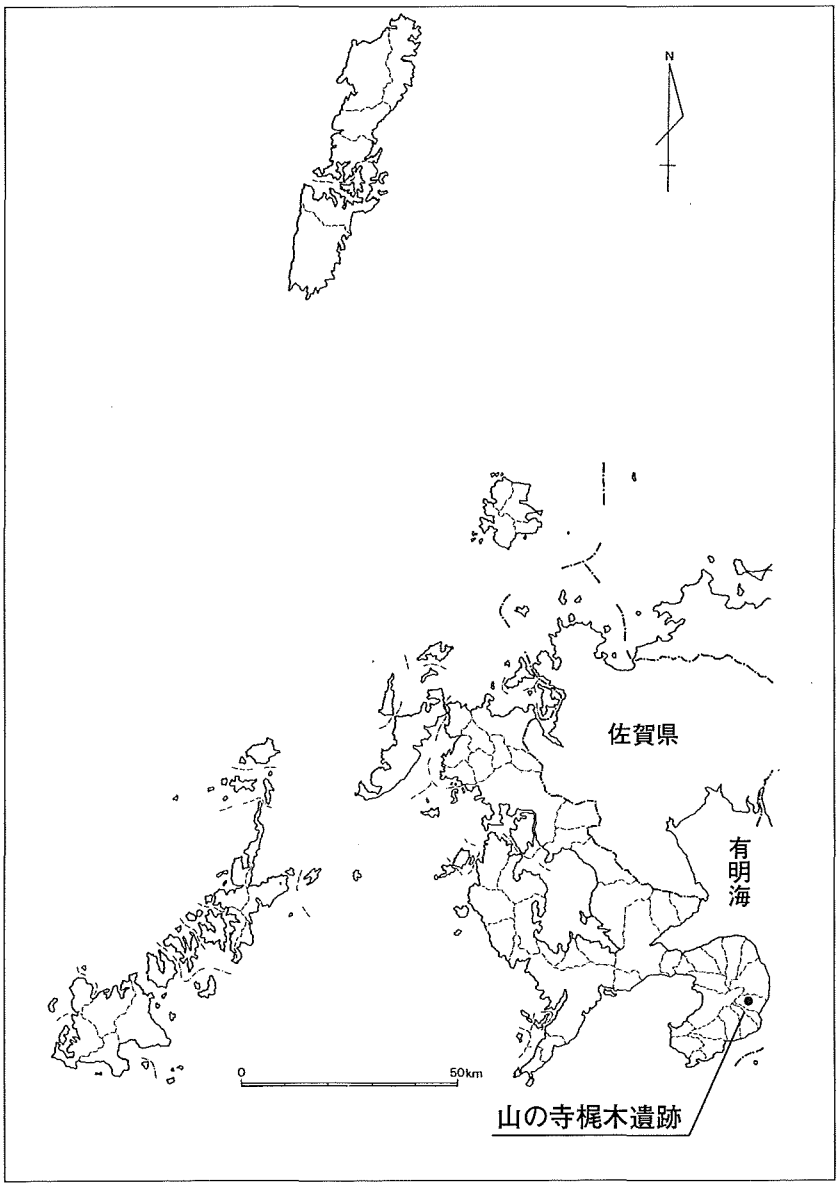
5．本書の総括編集は福田がおこなった。

総　目　次

第Ⅰ部　山の寺梶木遺跡 …… 1
南高来郡深江町所在
第Ⅰ章．遺跡の立地と環境 …… 4
第Ⅱ章．調査の経緯 …… 6
第Ⅲ章．主要遺跡内容確認調査の概要 …… 8
第Ⅳ章．まとめ …… 14

第Ⅱ部　岳崎古墳 …… 17
北松浦郡田平町所在
Ⅰ　岳崎古墳の位置 …… 21
Ⅱ　歴史的環境 …… 22
Ⅲ　調査 …… 30
Ⅳ　まとめ …… 37

第Ⅰ部　山の寺梶木遺跡



遺跡位置図

例　　言

1．本報告書は南高来郡深江町田中名字山寺に所在する山の寺梶木遺跡の主要遺跡内容確認調査の報告書である。

2．調査は長崎県教育庁文化課が事業主体となり，深江町教育委員会の協力を得て，平成９年８月９日から10月２日にかけて実施した。

3．調査担当

長崎県教育庁文化課

文化財保護主事　福田　一志

文化財調査員　　永嶋　　豊

4．調査協力

深江町教育委員会

5．土器の実測は網谷泰代，トレースは渡辺洋子の協力を得た。

6．本書における遺物・写真・図面などは長崎県教育庁文化課立山分室で保管している。

7．本書の執筆・編集は福田がおこなった.

本　文　目　次

第Ⅰ章　遺跡の立地と環境 …… 4
　第１節　地理的環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 4
第Ⅱ章　調査の経緯 …… 6
第Ⅲ章　主要遺跡内容確認調査の概要 …… 8
　第１節　調査の概要 …… 8
　第２節　土　　層 …… 9
　第３節　出土遺物 …… 10
第Ⅳ章　まとめ …… 14

挿　図　目　次

第１図　深江町内遺跡地図 …… 5
第２図　山の寺梶木遺跡周辺図 …… 5
第３図　昭和32年調査区配置図 …… 7
第４図　グリッド配置図 …… 8
第５図　土層図 …… 9
第６図　土器実測図 …… 11
第７図　石器実測図 …… 12
第８図　石器実測図 …… 13
第９図　遺跡の範囲図 …… 14

表　目　次

表１　深江町内遺跡地名表 …… 5

図　版　目　次

図版１　遺跡調査風景 …… 41
図版２　グリッド完掘状況 …… 42
図版３　土器 …… 43
図版４　石器 …… 44

第Ⅰ章　遺跡の立地と環境

第1節　地理的環境

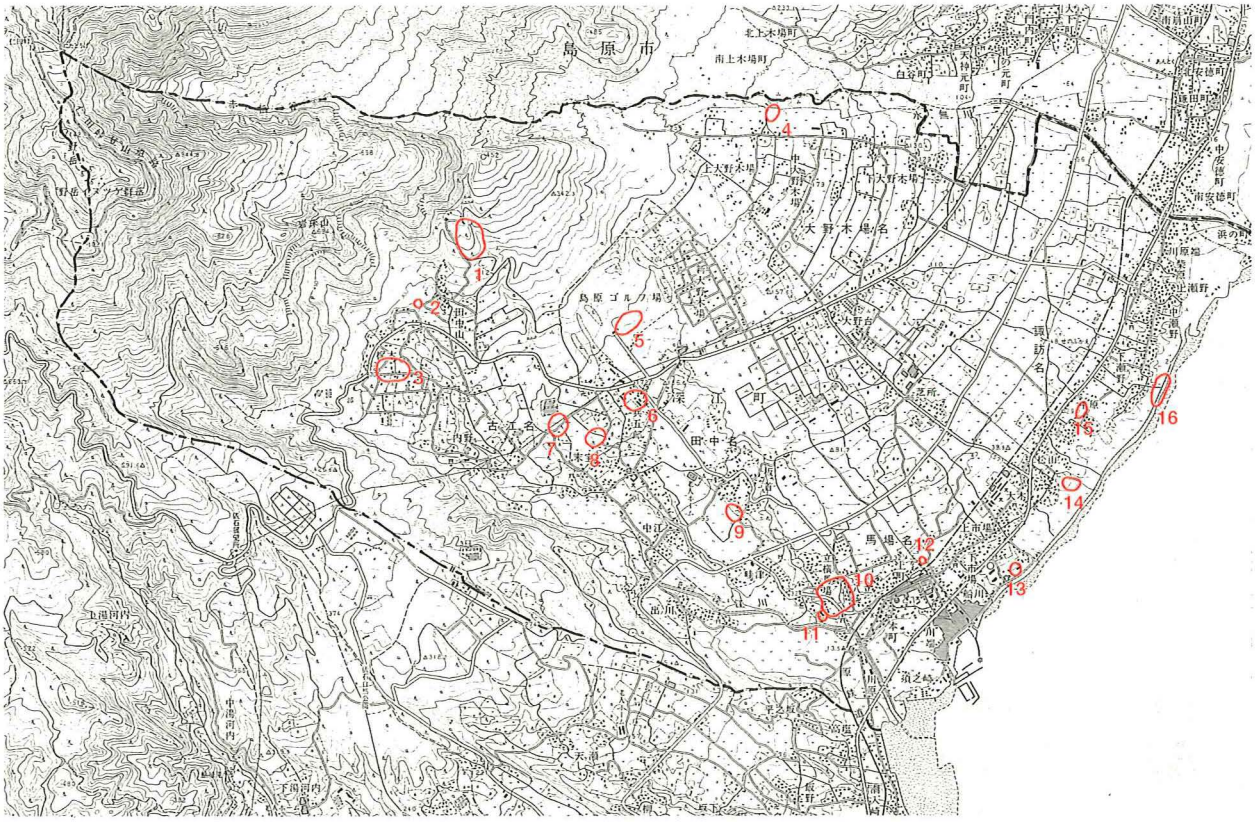
島原半島の東側に位置する深江町は，雲仙岳を中心に据える島原半島の他の市町村と同様に，急峻な山々を背後に控え，緩傾斜しながら海岸部に到達する扇状台地中に位置している。深江町の町域は雲仙岳を中心とした扇形を呈しており，常に雲仙山系の火山灰の影響を受けながら，扇状地化していったことが知られる。平成2年に噴火し，平成7年に終息宣言が出された普賢岳は，ここ深江町に甚大な被害をもたらしたが，このときの火山灰は今でも土中から検出されることから，深江町の土壌が雲仙山系と深い関わりにあることを思い知らされる。今回調査した山の寺梶木地区も普賢岳を目前にみることができる至近距離にあり，近くの田中地区は土石流よけの対策が講じられている。また，長い歴史の中で考えるならば，島原半島から有明海を挟んで東側に位置する，阿蘇山の噴火の影響もあったであろう。島原半島東海岸部で確認される，阿蘇Ⅳの粘土層の堆積は，このことを確認することのできる重要な層位といえよう。火山灰についての影響は，島原半島全体について言えることであるが，今回調査対象となった山の寺梶木地区は特にその影響が大きかったものと思われる。

今回，調査対象となった山の寺梶木地区は，背後に野岳（1156m）を控え，そこから派生した岩床山（694m）の直下の山裾に位置する。比高差，約300mの急激な斜面から，緩斜面への変化点に遺跡は存在し，遺跡を挟むように何本かの川が流れ，これらが合流して深江川を形成している。遺跡は三方を山に囲まれ，前方に有明海を見下ろすことができる高所にあり，先述したように，急峻な山麓と緩傾斜面の接点に位置するという大きな特徴を持つ。

第2節　歴史的環境

深江町は長崎県遺跡台帳によると，16の遺跡が確認されている。16遺跡の内訳は，縄文時代の遺跡が10，弥生時代が2，中世が3，不明1となっており，縄文時代の遺跡が多いことが知られる。縄文時代でも晩期の遺跡が多く，時間的に多少ずれはあるものの，瀬野海中干潟遺跡などの海岸部から山の寺遺跡のように標高が高い地域までその分布は及んでいる。山の寺地区には本遺跡のほかに，山の寺宝篋印塔が1基知られ，その規模においては県下でも最大級のものと考えられる。また，山の寺の地名からもこの地に寺があったことが伝承されているが，付近に宝篋印塔を集めた場所があることなどから，その周辺に寺跡があったと推定されている。

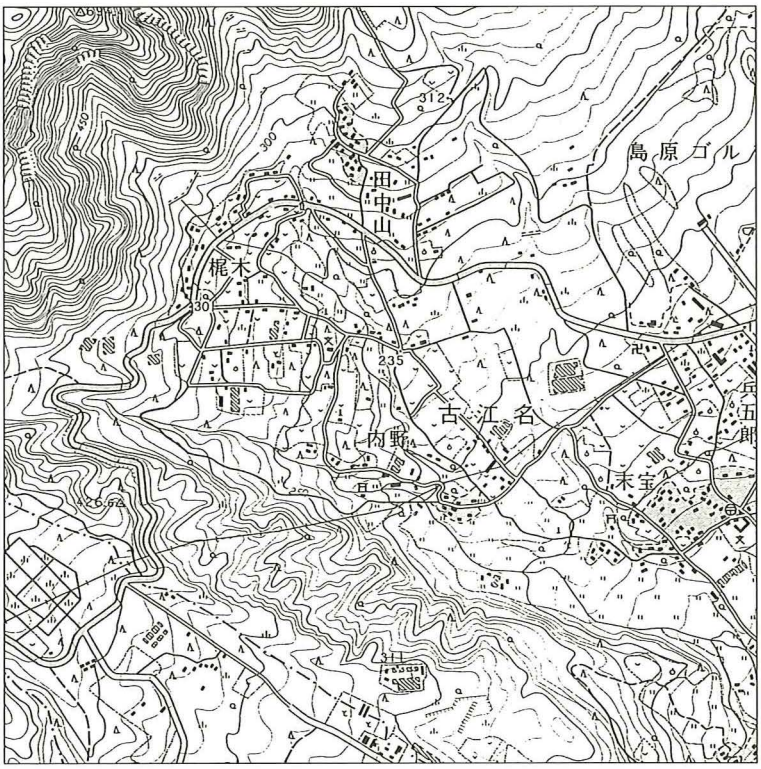
調査された遺跡としては，瀬野海中干潟遺跡と本遺跡のみで，他の遺跡についてはその内容は確認されていない。



第１図　深江町遺跡地図（Ｓ＝1／50.000）

番号	遺跡名称	所在地	時代
1	田中遺跡	田中山牡丹開墾地	縄　文
2	山の寺宝篋印塔	田中名字山寺	中　世
3	山の寺梶木遺跡	田中名字山寺	縄　文
4	深江木場遺跡	大野木場名椎ノ木坂	縄　文
5	池平遺跡	池平	縄　文
6	弓太郎遺跡	古江名弓太郎	縄　文
7	内野遺跡	古江名内野	縄　文
8	末宝遺跡	古江名末宝	縄　文
9	江川遺跡	田中名江川	縄　文
10	深江城跡	馬場名立馬場	中　世
11	深江貝塚	馬場名立馬場	不　明
12	井手口キリシタン墓碑	馬場名井手口	中・近世
13	舟川遺跡	諏訪名舟川	縄　文
14	瀬野遺跡	諏訪名中原	弥　生
15	中原遺跡	諏訪名中原丁	弥　生
16	瀬野海中干潟遺跡	諏訪名下瀬野	縄　文

表１　深江町内遺跡地名表



第２図　山の寺梶木遺跡周辺図（Ｓ＝1／25,000）

第Ⅱ章　調査の経緯

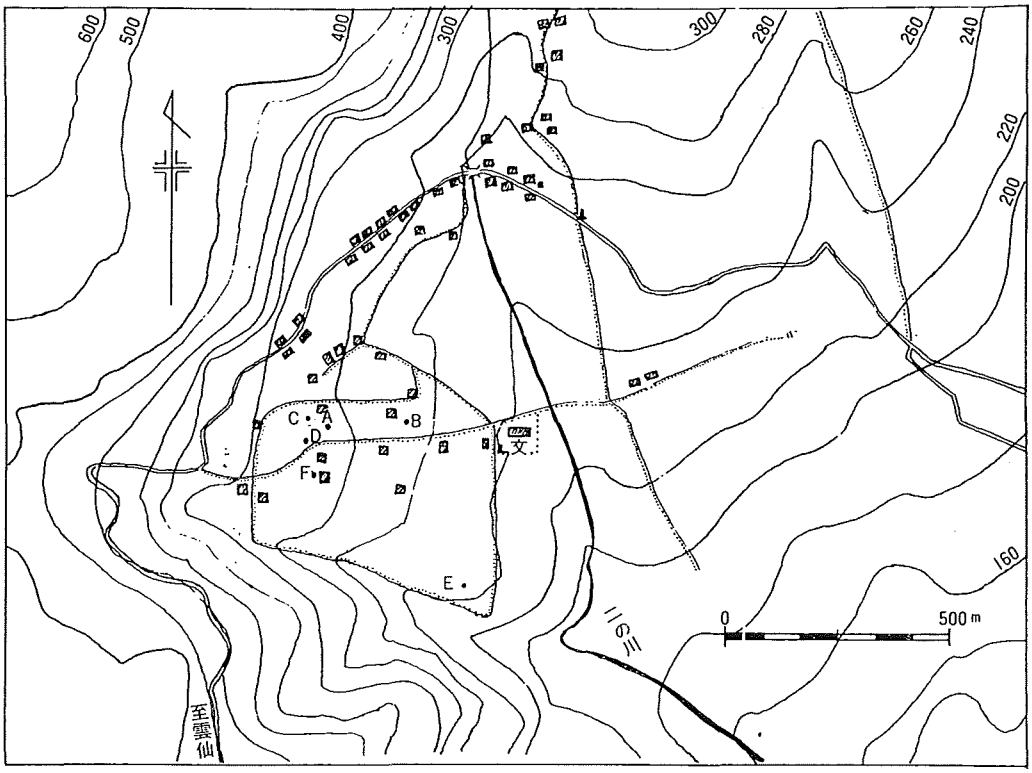
第１節　調査の経緯

山の寺梶木遺跡が知られるようになったのは，島原市在住の古田正隆の山の寺採集資料中に籾の圧痕の付着した縄文土器が採集されたことによる。古田は，昭和27年頃から山の寺地区でおこなわれていた開墾や耕作で多量に出土した土器を採集するうちに，昭和31年に籾痕のついた土器片２点や，紡錘車２点を採取し，当時の新聞に「日本近代文化の発祥地山の寺」と報道された。古田は当時九州大学講師であった森貞次郎に連絡をとり，森とともに山の寺周辺で表面採集をおこなっている。昭和32年，深江村教育委員会の協力のもと，学術調査をおこなうはこびとなった。戦後，登呂遺跡の調査以後，弥生時代の研究は急速に進展し，弥生時代を規定する根幹ともいうべき水稲農耕の起源について論究されているときでもあった。昭和32年の最初の調査から数回に及ぶ調査は，この遺跡のもつ重要性を示している。長崎県文化課においても県内の遺跡の中でも重要な遺跡として認識され，今回の調査のはこびとなった。

第２節　調査の履歴

１回目の調査は，昭和32年６月におこなわれている。第３図のＡ～Ｄ地点の調査がおこなわれ，Ａ地点では開墾や耕作が包含層に達し，撹乱の状況を呈していたとしている。Ｂ地点は２層に包含層があったものの，Ａ地点と同様撹乱の状態であり，Ｃ地点も同様としている。これに対し，Ｄ地点では敷石住居跡が確認されている。その状況は，表土下30㎝で木炭層の堆積が認められ，木炭の堆積下に拳大の石を直径75㎝の円形に敷き並べ，敷石は焼けていたことから炉跡と認識されている。住居址は，炉跡を中心にした１辺５ｍの隅丸方形の住居址であると報告されている。遺構としてはこの敷石住居とされるものの確認だけに止まっているが，遺物は土器が多数出土している。２回目の調査は同年８月におこなわれ，森貞次郎が参加されている。このときの調査区は第　図のＥ・Ｆ地点の２箇所であるが，遺物が多量に出土している。この調査により，森は山の寺遺跡から出土した土器について山ノ寺式土器と命名され，それまでの黒川式土器→夜臼式土器の編年に山ノ寺式土器を加え，山ノ寺式→夜臼式とした。この調査後，日本考古学協会により「西北九州総合調査特別委員会」が結成され，山の寺遺跡も調査の対象となった。西北九州総合調査特別委員会の調査は，昭和35・36年に実施されているが，同時に北有馬町原山支石墓群，島原市礫石原遺跡も調査され，弥生時代と縄文時代の接点，つまり日本における稲作農耕の起源を探る目的のための調査であった。

西北九州総合調査特別委員会による山ノ寺梶木遺跡の発掘調査は，Ａ～Ｃの３つの調査区を設定している。３つの調査地点については，概略しかわからないが，Ａ地点では撹乱状態であったが山の寺式土器・黒川式土器を出土している。Ｂ地点では土器・石器が多量に出土している。土器は山ノ寺式土器・組織痕文土器を中心に扁平打製石斧・紡錘車・円盤状石製品等が出土し，遺物量は膨大な量にのぼっている。特に２個の紡錘車の発見は，「縄文晩期の織物技術」を傍証するものとして注目されている。この数回の調査についての報告は，概報等が知られているだけで唯一，古田の編集による報



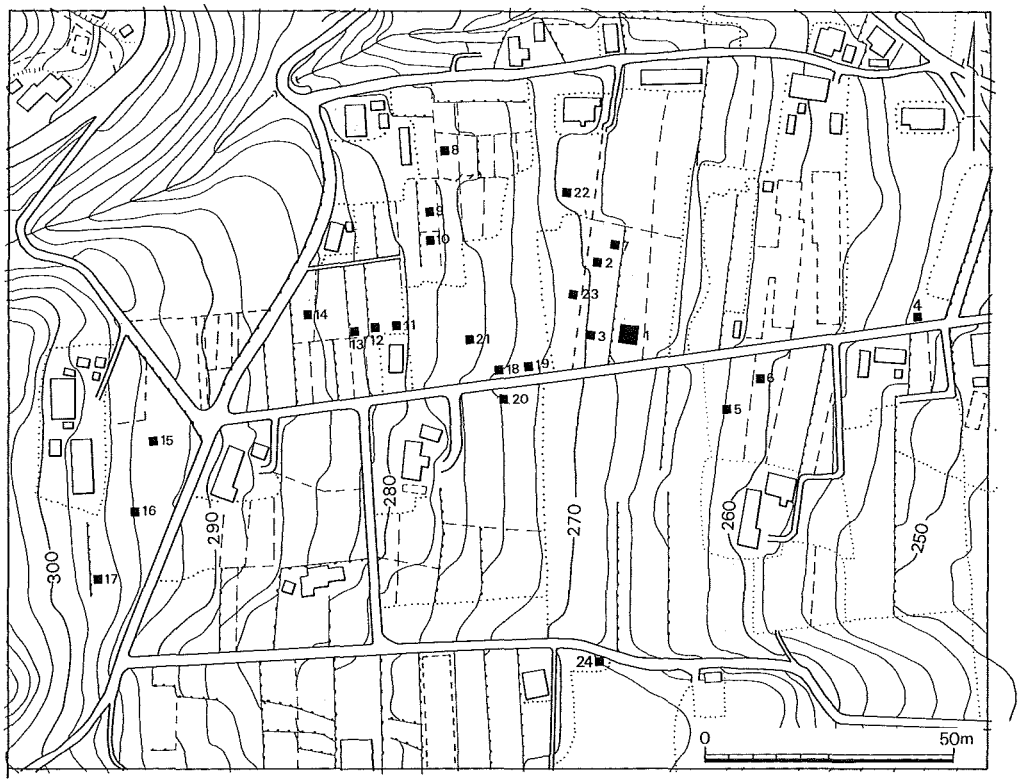
第３図　昭和32年調査時の調査区配置図（1973.「山の寺梶木遺跡」より転載）

告書が刊行されているのみである。山の寺遺跡がもたらした問題の大きさに対し，山の寺遺跡の実体は不明瞭な部分が多いと言わざるをえない。

上の図は，昭和32年調査時の調査地点を示している。今までの調査歴については先述したが，調査地点については詳細な記録がなく，唯一報告された第３図の地図だけである。ここにおけるＡ～Ｆ地点は昭和32年調査時のもので，西北九州総合調査特別委員会のＡ～Ｂ地点については，報告等がないため詳細はわからない。いわゆる山の寺式土器として紹介されるものは，西北九州総合調査特別委員会調査のＢ地点の資料であり，上図のＢ地点と近接するということである。上図と今回の調査地点については次ページのグリッド配置図を参考にしてもらいたい。

［参考・引用文献］

乙益重隆・賀川光夫1960「２，島原半島・山ノ寺遺跡」『九州考古学10』九州考古学会
森貞次郎1966「原山遺跡」『九州考古学14』九州考古学会
古田正隆1973『山の寺梶木遺跡』百人委員会埋蔵文化財報告書第１集



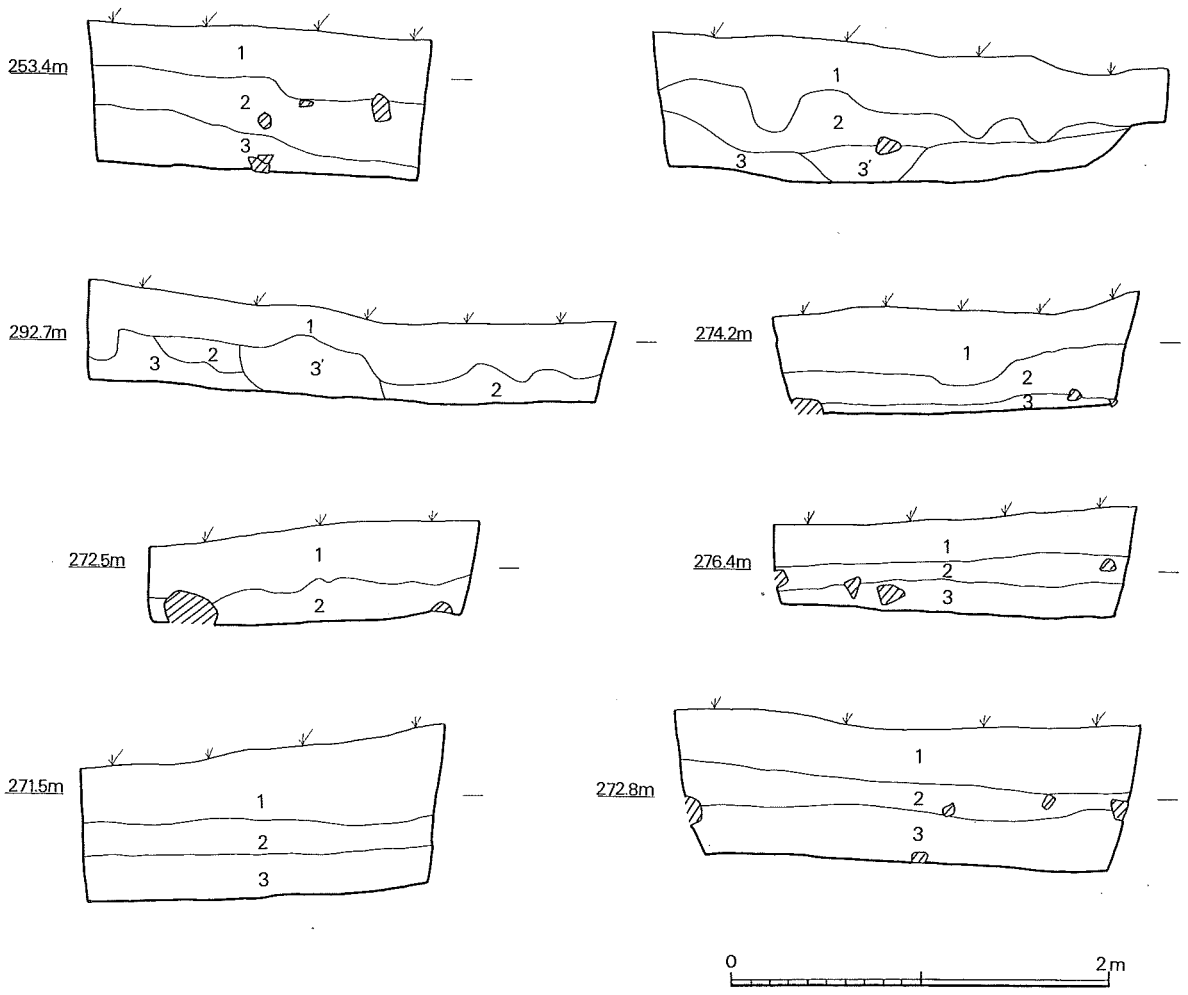
第4図　グリッド配置図

第Ⅲ章　主要遺跡内容確認調査の概要

第1節　調査の概要

今回の調査は，長崎県が実施している主要遺跡内容確認調査事業に伴うもので，遺跡の現状やその内容を新たに確認することを目的としている。調査は，2×2mのグリッドを基本に，山の寺地区全体に設定し，遺跡の範囲広がりと包含層の状態を確認するために24のグリッドを設定した。昭和30年代の調査区周辺を重点に調査区の設定を試みたが，土地所有者との交渉段階で調査区も限定された。

遺跡の内容を知ることも大きな目的であったが，旧調査区の現状が竹林に覆われていたり，すでに耕作等によって削平されていたこともあり，目的を完遂することはできなかった。ただし，遺跡の範囲などについては旧調査区との関連からも，大方捉えることができたことが一つの成果であった。今回の調査ではグリッドナンバー1・11～14・15・16・24では遺物の出土が見られなかった。土層も攪乱を受けた状況で，包含層とした2層も削平されていた所もあった。このことについては，昭和32年の調査時にも開墾や耕作による深耕著しい旨が記載されており，この時点でも同様な結果を得ている。これに対し旧調査において遺物が出土した周辺にあたる18・19・23・22・21では包含層も薄いとはいえ残っており，以前の調査で住居址として報告された地域周辺は，現在も遺物が出土する可能性が高いことが理解できた。ただ，21グリッド周辺は，竹林に覆われ調査区を設定することが困難なためこの周辺の調査に留まった。以前は，かなりの量の土器が採集できたということも，包含層の浅さや，その後の開墾等により，天地替えがおこなわれた結果であろう。



第5図　土層図

第2節　土層

土層は，基本的に3層で構成される。1層は火山灰質で，漆黒色を呈し粒子は細かくサラサラしている。2層は暗褐色を呈する遺物包含層である。1層と3層との漸移層的色彩を呈するし，1層よりもやや硬質である。3層は明黄褐色を呈し，火山灰質であるがやや粘性に富み，下部に大形の安山岩礫を多量に包含する。土の堆積は遺跡全体において浅く，特に包含層までは20～30cmと浅いため，耕作による深耕などによって破壊されることが予想される。特に土そのものが火山灰質で，堆積と流失を繰り返し，特に緩傾斜面に位置するこの地域は，火山灰の流失が多いため土層の堆積が薄く，地山に安山岩の転石が多いと考えられる。島原半島域は，火山灰土が非常に発達しているが，地域によってその構成も多様である。島原半島の北側に位置する国見町の百花台遺跡では，良好な土層8層まで確認されているが，吾妻町弘法原遺跡においては地山まで4層で留まる。西側に位置する島原市では，古代を中心に火山灰の発達がみられ，南側に位置する山の寺遺跡は3層だけで，雲仙山系や阿蘇山の

火山灰の影響は島原半島でもその地形や地域によって異なることがわかる。今後，島原半島における火山灰層については，土層の柱状図などを作成し，共通した土層理解のもと調査をする必要があろう。

第3節 出土遺物

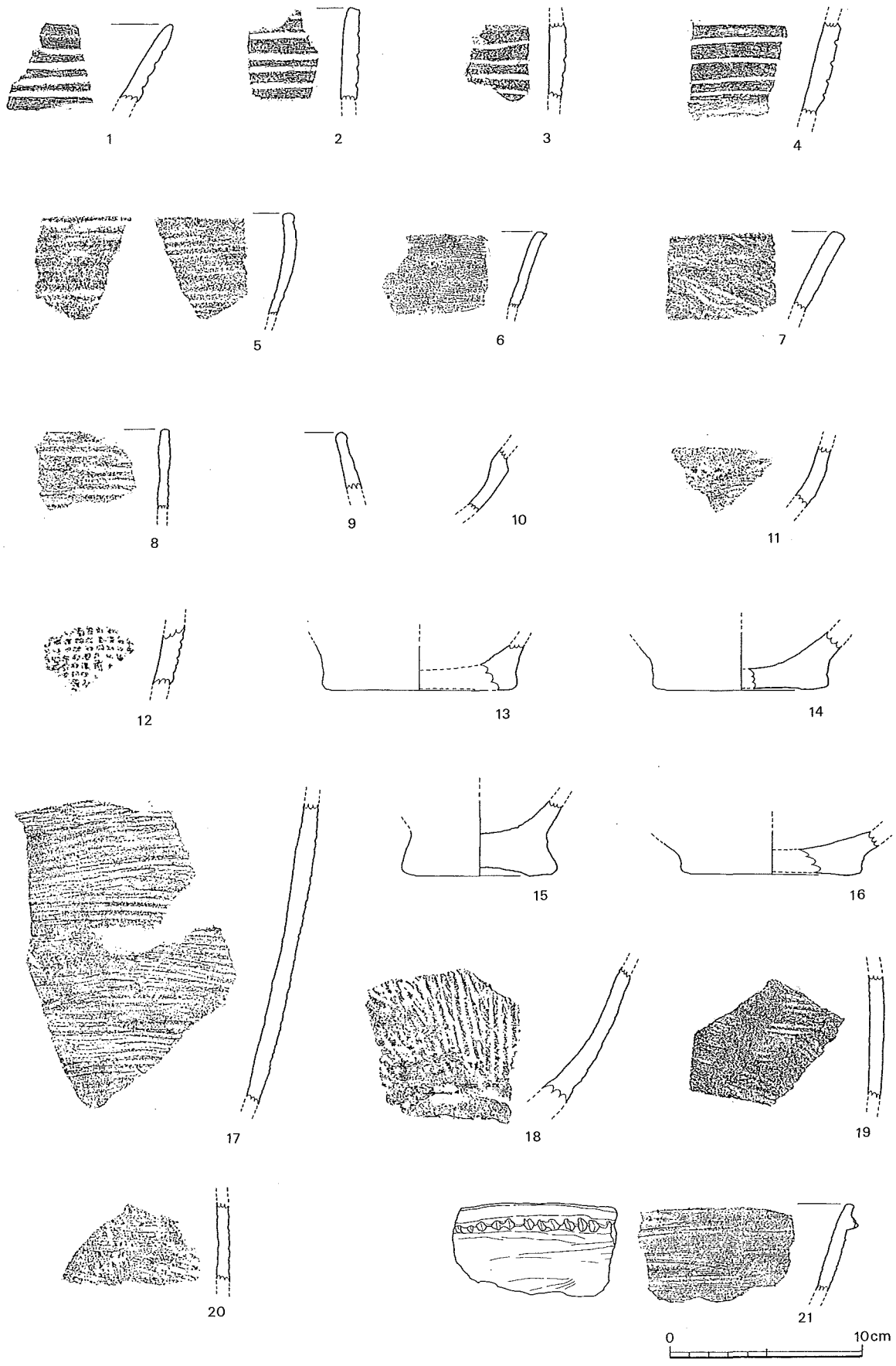
1，土器

今回の調査では黒川式土器を主体に出土している。1～4は深鉢の口縁部で，4条ほどの沈線を持つ一群である。1はやや外側に開き，口唇部が三角形状に薄く引き延ばされている。内外面共にヘラで磨いている。沈線は丸い施文具で斜め下方向から沈線を入れた後にヘラ磨きしている。胎土は黄橙色を呈し，堅緻である。2・3は口縁部であるが胎土が黄白色を呈し，口唇部を平坦にしている。沈線は斜め下方から施文しており，その後の磨きのため1と同様，沈線の上部が潰れることを特徴とする。4の沈線は非常にシャープで磨きによる潰れが見られない。これらの土器は島原半島礫石原遺跡を標式とする，礫石原式として認識できよう。5は灰黄白色の胎土で，砂粒を多く含む。内外面ともに荒い条痕で整形しており，内面はかるく撫でて口縁部で内湾する。口唇部は外側に丸く納める。6は口唇部を外側にやや突出させ，口縁端部には一条の沈線をもつ。外面は粗い条痕，内面は横ナデ。7は口縁端部を平坦にし，外面の口唇部直下1㎝のところで条痕を撫で消している。9は波状口縁になると思われリボン状突起をもつものであろう。10は唯一の浅鉢で，肩の部分で屈曲する精製土器。11の組織痕文土器もこの1点だけの出土である。13～16は底部の資料であるが，15は深鉢，16は浅鉢のものであろうか。17～29は底部から底部にかけての資料で，17は横方向に数条の単位をもって横方向に走る。18は底部付近の資料で，粗い条痕を底部方向から上へ施す。内面は撫で整形か。21は1点だけ出土した刻目突帯の土器である。表面の条痕の状態は6に近似し，内面は基本的に条痕を施してあるが，口縁部付近はヘラ撫でをおこなっている。全体的に薄身でほぼ直口して底部に至るものと思われる。突帯は口縁直下に施し，突帯の幅は小さく刻目も鋭い山形を呈する。胎土は粗く白色の石英粒状のものが多量に混入している。内外面に煤の付着が見られる。突帯文土器のなかでも後出のものであろう。

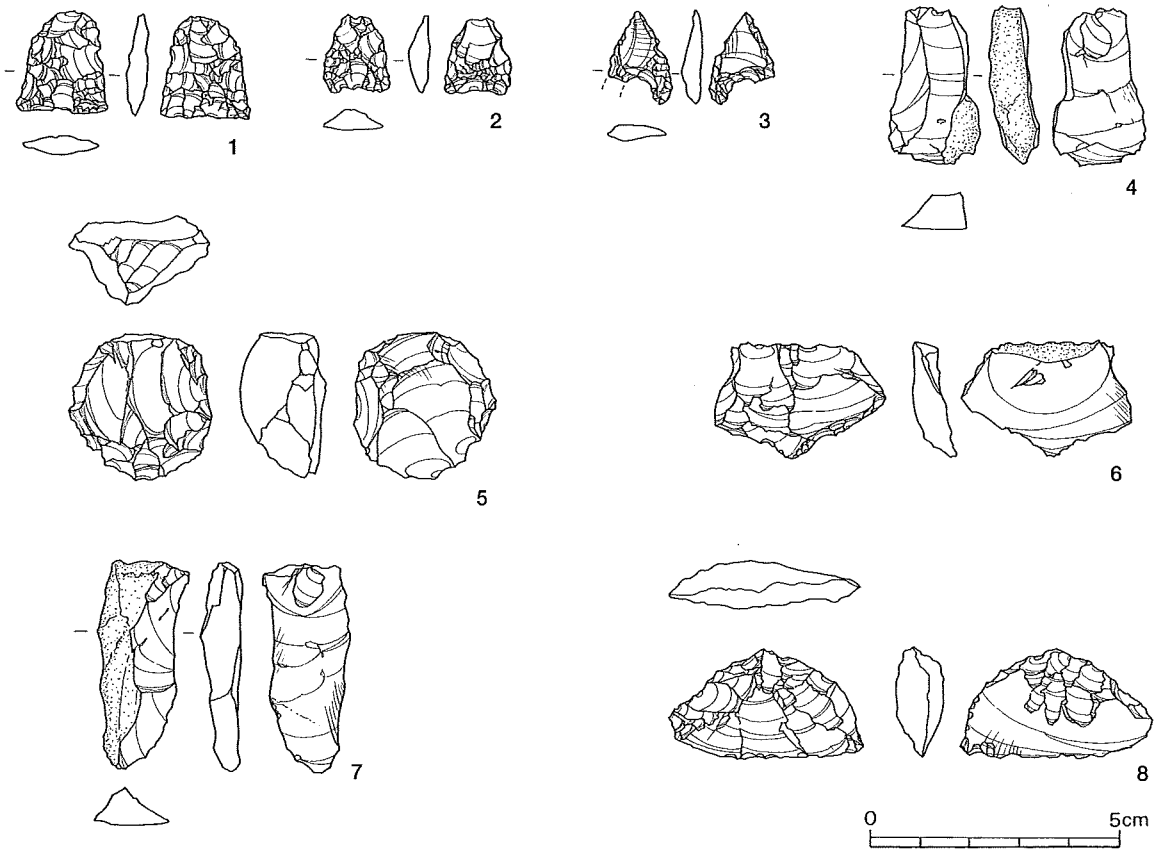
今回の調査ではいわゆる山の寺式土器の出土は少なく，一段階古手の土器（礫石原式）の出土が多かった。今回の調査は，山の寺式土器が多量に出土した，昭和32年調査のB地点周辺部であることや，すでに耕作による深耕が進んでいたことも遺物の出土に繋がらなかった原因の一つと理解できよう。また，今回の遺物からはなんともいえないが，黒川式土器や山の寺式土器の出土は，編年的連続性からみても今後の山の寺式土器の研究上，重要なことであろう。

2，石器

石器は石鏃の他，扁平打製石斧・円盤状石製品・石核等が出土しているが，石器組成を語るまでにはいたっていない。石鏃は平基のものが2点，凹基のものが1点出土しており，すべて良質の黒耀石を素材とし，緻密な剥離をおこなっている。全体的に小型で，1・2は先端部を失っている。3は主要剥離面を残し，先端部は素材を生かし，加工は脚の部分周辺に集中する。5は求心的な剥離をおこなった石核である。断面が半円状を呈し，剥離面から見て小さな剥片しか剥離できていないと考えら



第6図　土器実測図（S=1／3）

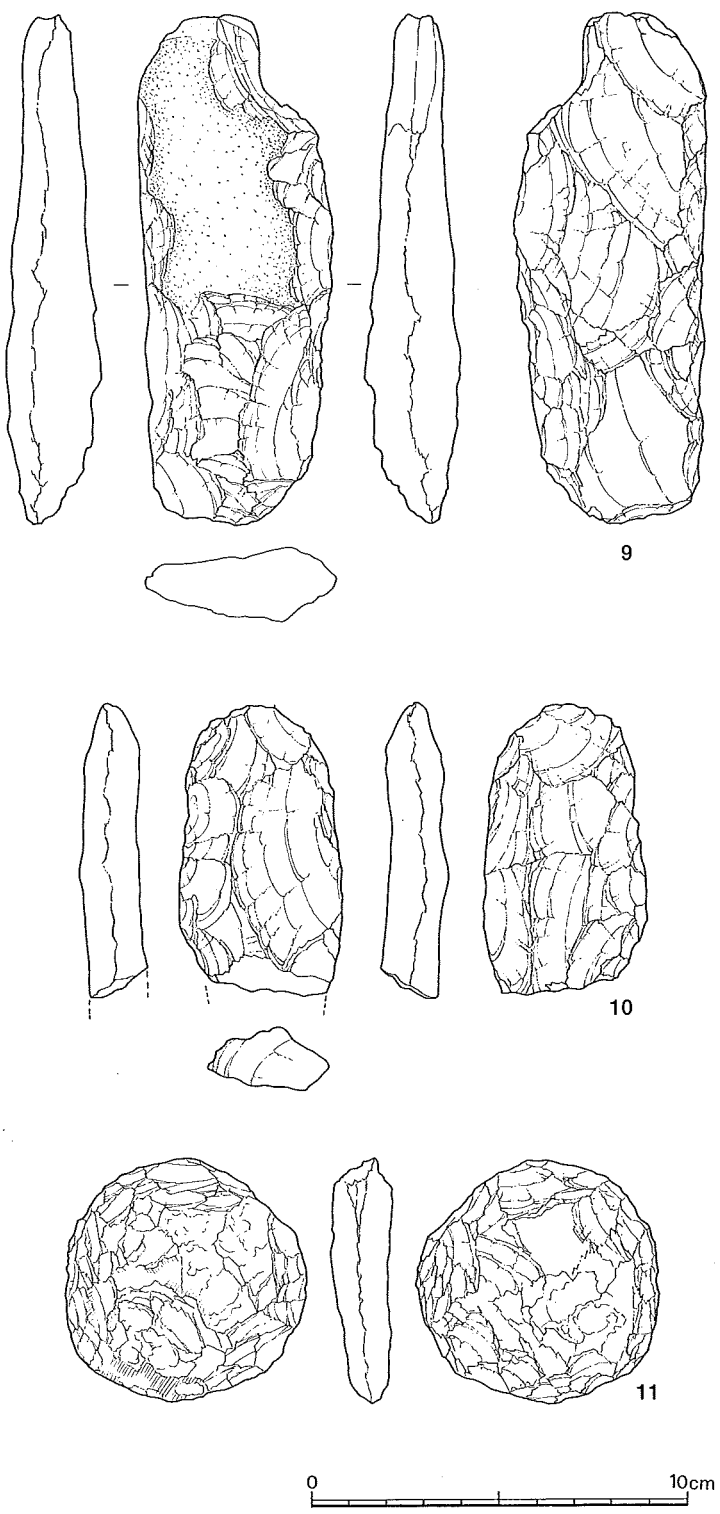


第７図　石器実測図（S＝2／3）

れる。４・６～８は剥片類であるが，打面や側面に自然面を残しことを大きな特徴とし，４・７などから縦長剥片を剥離しようとする意図が伺える資料である。石鏃が不純物を含まないのに対して，この２点は気泡が入る。８は密なリングを持ち，上部に加工を集中させている。上部の加工は，スクレイパー的要素を考えさせる。

玄武岩を素材とする石斧２点が出土している。９は上部に自然面を残し，刃部方向が厚みを持っている。全体的にやや風化が進んでおり，摩耗痕の観察は難しいが，刃部から直線的に剥離した面が見られ，使用の際の剥落痕の可能性がある。10も折損部を持つ小型の打製石斧である。11は玄武岩を素材とした円盤状石製品である。周辺加工は風化によって判然としないところがあるが，一部摩耗痕が観察できる。この他石皿の破損品等が出土しており，量的には少ないが，この時期の石器組成の一部を示している。

先の山の寺遺跡の調査でも扁平打製石斧が多量に出土しており今回の遺物内容と大過ない。このことから山の寺式土器の石器組成のなかに，平基の石鏃・扁平打製石斧・円盤状石製品が重要な位置を占めることは疑いのないことであろう。扁平打製石斧の本県での出土は，西平式土器に伴うことを初現とし，三万田から弥生時代にまで継続していたことが知られている。本州では縄文時代中期に出現し，北九州では後期中葉の鐘崎式土器の段階ですでに出現するこの石器が，長崎県ではそれ以降に出



第8図　石器実測図（S=1／2）

現することになり，扁平打製石斧の伝播が東からの文化の波及によってもたらされたことを示す好材料となっている。また，他の地域では弥生時代には消滅するが，大村の富の原遺跡の例から長崎県域では中期中葉段階まで残ることが知られる。

円盤状石製品については昭和30年代の調査時も出土しており，この時期の一般的な石器組成として捉えられよう。今回の調査では出土はなかったが，晩期を通じて小型円盤状石製品が出土することが知られている。これについては伴耕一郎によって集成されており，縄文時代後期後半～晩期にかけて，特に磨消縄文系土器から黒色磨研土器の移行期に注目されるとしている。また一方では西平式土器以降出現する十字形石器の出土が山の寺式の段階にはないことなどは，縄文後期後葉から晩期の石器組成を考える中で大きなポイントになるであろう。

［参考・引用文献］

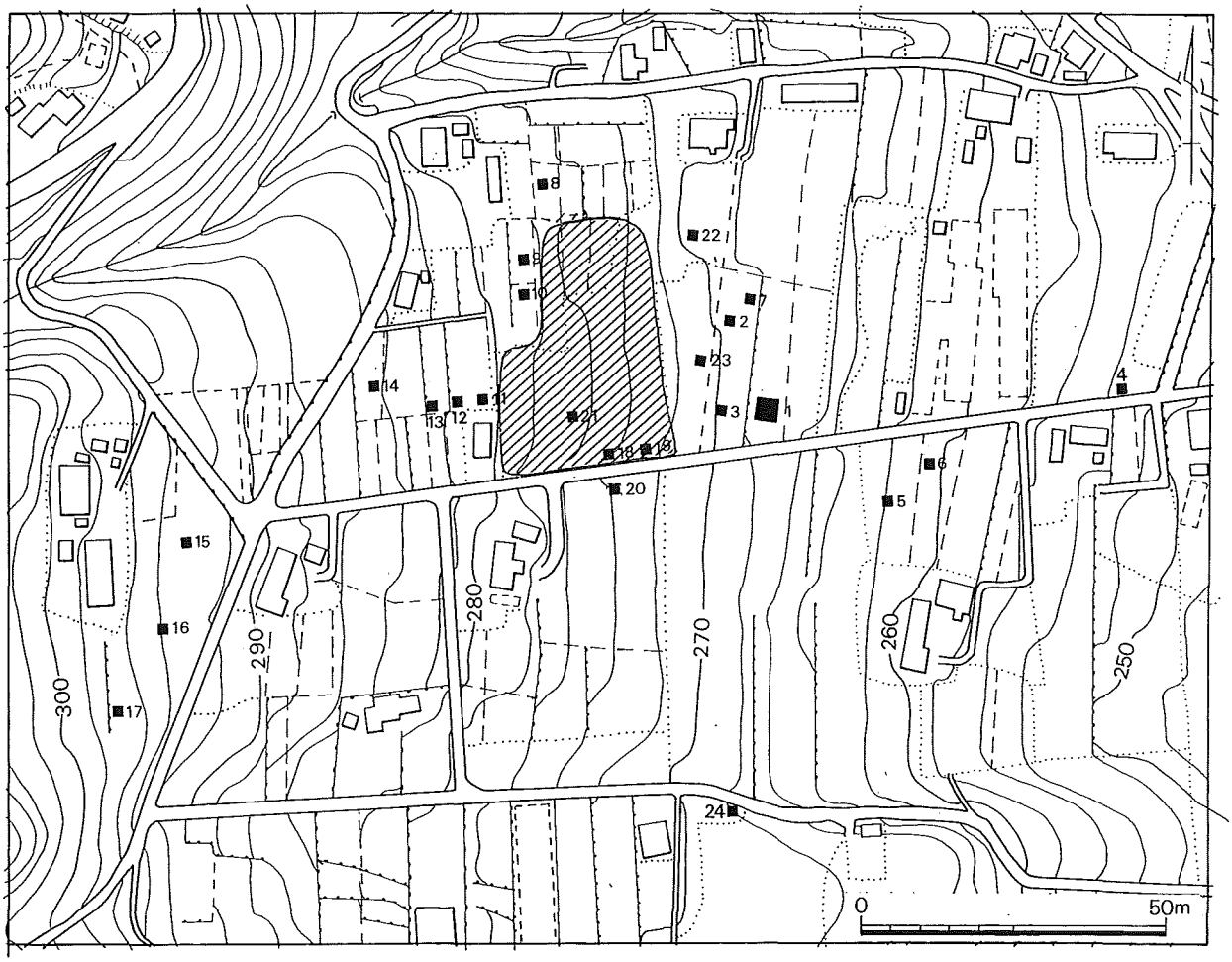
古田正隆1973『山の寺梶木遺跡』百人委員会埋蔵文化財報告書第1集

稲富裕和1987『富の原』大村市文化財調査報告書第12集

伴耕一郎1990「小型円盤状石器について」『肥賀太郎遺跡』長崎県埋蔵文化財調査集報13

第Ⅳ章　まとめ

今回の調査では出土遺物も少量で，現在問題となる所の，いわゆる山の寺式土器についても検討することができなかった。ただし，島原半島を取り巻く縄文晩期の遺跡では，多くの山の寺式土器が出土しており，今後も山の寺式土器については縄文晩期の研究において避けて通れない土器型式として残ることは間違いない。ただ，山の寺遺跡の現状については，先述したように包含層が薄く戦後の開拓や，耕作の深耕によりかなりの破壊が進んでいることが理解でき，今後の開発や研究のためにもゾーニングしておく必要があるものと考えられる。第９図は今回の調査により山の寺遺跡の範囲をある程度示したが，もちろん全体に調査範囲を設定していない現状から，調査をおこなった地域や，さらに先の数回の調査によって得られた範囲に限定されることを明言しておく。グリッドを設定していない範囲についても，工事等がかかる場合は注意する必要があろう。



第９図　遺跡範囲図

山の寺式土器の行方

山の寺式土器については，農耕文化の初源期について多くの問題提起がなされたが，昨今においてはその型式名称さえ影が薄いのが現状である（註１）。ここでは山の寺式土器の型式設定から，現状について述べていきたい。

山の寺式土器の型式設定は，山の寺遺跡に古田とともに最初から関わっていた森貞次郎によって提唱されている。森は原山支石墓群の調査報告の中で「山ノ寺式土器は九州北部海岸地方でも弥生時代形成直前の土器型式であることが示唆され」夜臼式土器よりも古い一群として位置づけた（森1966)。また，乙益重隆は精製，粗製ともに土器の大勢は黒川式を踏襲し，弥生式土器のセット関係がこの段階で構成されたとし，山ノ寺式土器の特徴についても具体的に触れている。また，原山式を設定し，広義の夜臼式土器としながらも黒川式→山ノ寺式→原山式→夜臼式と編年された（乙益1965)。この直後，森は九州の縄文晩期の土器は黒川式・山ノ寺式の二期にわけられるとし，乙益と同様に土器の特徴について述べられている。森はこのなかで山の寺式と夜臼式の区別はむずかしいとしながらも，壷形土器や甕形土器の相違について触れ，特に甕形土器の刻目突帯の位置を比較して山の寺式と夜臼式を区分している（森1966)。この時期，山ノ寺式土器は九州の晩期土器編年の中で確個たる位置を築きつつあり，黒川式→山ノ寺式→板付Ⅰ式・夜臼式の編年観が確立したかのようであった。この時期の山の寺式土器の位置づけについては，森が述懐するように，「弥生式土器と完全に分離できる夜臼式をもとめ，さらに夜臼式土器の年代幅を求めようとした結果であった」(森1982)。1966年宇木汲田遺跡の貝塚調査の結果，貝層の上半部で板付Ⅰ・Ⅱ式土器と夜臼式土器・下半部とその下の黒褐色土層上半部で板付Ⅰ式土器と夜臼式土器・黒褐色土層下半部で夜臼式土器の単純層が確認された（田中1986)。板付Ⅰ式とともに弥生時代の最古の形式とされていた夜臼式土器が，板付Ⅰ式より古い段階から出現していたという事実は，山の寺式→夜臼単純→板付Ⅰ式・夜臼式という新しい編年観を生み出すこととなり，夜臼式土器が早い時期から存在することを決定づけた。また稲作の開始が刻目突帯文の時期にまで遡ることを確認した意義は大きい。夜臼式土器の単純層はその後板付遺跡，菜畑遺跡などで確認され，夜臼式の年代が古くさかのぼることは確実となるが，山の寺式土器の編年上の不合理性が唱えられるようになる。このことについては板付遺跡の調査を通して山崎純男による夜臼Ⅰ式→夜臼Ⅱａ式→夜臼Ⅱｂ式＋板付Ⅰ式の編年の中に端的に現れ，山ノ寺式土器は極めて地域色の強い島原半島地域の土器と結論づけられた（山崎1980)。ただし，同一地域における土器編年が要求されるとしており，先の編年が北九州域を中心としたもので，今後島原半島域での編年との突き合わせが必要になることをもら指摘したものと思われる。山崎の編年の段階では，山ノ寺式は晩期編年上，主流から外されることなる。このような中で山ノ寺式土器の特徴をもつ土器が佐賀県菜畑遺跡で確認された。菜畑遺跡の報告のなかで中島直幸は九～十二層出土の土器が山の寺式土器に酷似しているとして，編年上でも山の寺式を復活させている。

藤尾慎一郎は突帯文土器はその地域色が大きいとして，二条突帯甕を地域によって型式名をあたえ福岡平野の二条甕を「筑前型」，有明海沿岸の二条甕を「有明海型」，唐津平野の二条甕を「唐津型」

とした。また，山の寺式土器と福岡平野最古の突帯文土器である夜臼Ⅰ式土器との関係に触れ，最古の二条甕は山の寺式分布圏で成立した後夜臼式文化圏や瀬戸内・近畿へ広がり，最古の砲弾形一条甕は夜臼式分布圏で成立した後山の寺分布圏や瀬戸内・近畿に広がったとし，山の寺式と夜臼Ⅰ式は分布を異にする西部九州最古の突帯文様式として認められるとしている。編年上では山の寺・夜臼Ⅰ式として並行させている。藤尾の山の寺式土器は，二条甕と一条甕の出現について触れ，それぞれの出現が山の寺と福岡平野という地域を異にした所にあるとした新しい編年観を想定した。

田崎博之は，刻目突帯文土器の一群を①式～④式に分類し，①式は，森のいうところの刺突列点凹帯文の範疇で捉えることができるとして，山の寺式土器を充てている。また，山崎分類の夜臼Ⅰ式が②式に，夜臼Ⅱａ式が③式に，夜臼Ⅱｂ式が④式に対応するとし，さらに②式③式をそれぞれ夜臼式古段階・新段階とし，板付Ⅰ式土器として④式と⑤式を捉え，④式が板付Ⅰ式古段階⑤式が新段階にあたるとして分類している。つまり，山の寺式→夜臼式古段階→夜臼式新段階→板付Ⅰ式古段階→板付Ⅰ式新段階との編年観を提示した。

以上が、山の寺式土器の型式設定から、現在の編年上における位置づけである。近年においては、山崎の言うように山の寺式土器が島原半島における極めて地域的な土器として捉える方向性と、地域色は地域色としておさえ、並行関係のなかで捉えていこうとする２つの捉え方がある。いずれにせよ島原半島を中心とした山の寺式土器の検討そのものは、山の寺式土器そのものの型式の特徴から始め、今後長崎県の研究者の中で解決することが望まれる。

［註］

註１田中良之は山の寺式土器の設定から概念の変質・山の寺式の復活の小稿を建て，明快に山の寺式土器の位置付けをおこなっている。

［参考・引用文献］

森貞次郎1966『九州考古学14』九州考古学会
乙益重隆1965『日本の考古学Ⅱ縄文時代』河出書房
森貞次郎1966『日本の考古学Ⅲ弥生時代』河出書房
山崎純男1980「弥生文化成立期における土器の編年的研究」『鏡山猛先生古希記念古文化論攷』
山崎純男・島津義昭1981「九州の土器」『縄文文化の研究』４縄文土器Ⅱ　雄山閣
森貞次郎1982『九州の古代文化』六興出版
中島直幸1982『菜畑遺跡』唐津市教育委員会調査報告書第５集
田中良之1985「53長崎県山の寺梶木遺跡」『探訪縄文の遺跡』有斐閣選書
田中良之1986「唐津市宇木汲田遺跡における1984年度の発掘調査」『九州文化史研究所紀要』第三十一号
藤尾慎一郎1991「水稲農耕と突帯文土器」『日本における初期弥生文化の成立』－横山浩一先生退官記念論文集-Ⅱ 文献出版
田崎博之1994「夜臼式土器から板付式土器へ」『牟田祐二君追悼論集』牟田祐二君追悼論集刊行会

岳崎古墳

1999

長崎県教育委員会

例　　言

1．本書は長崎県北松浦郡田平町所在の，岳崎古墳調査報告書である。

2．調査は長崎県教育委員会文化課で行い，田平町教育委員会，地主の瀬戸トミ子氏・赤木定幸氏外の協力をいただいた。

3．本古墳の調査は県文化課の藤田と長嶋が行い，田平町教育委員会の文化財係長馬場聖美氏と石橋忠治氏には大層お世話になった。

4．本書に使用した図面・写真は県文化課が保管している。

5．本書の執筆・編集は藤田が行った

調査関係者

田平町教育委員会
岳崎地区代表　浦川俊介氏外

本　文　目　次

Ⅰ　岳崎古墳の位置と歴史的環境 …… 21
　　地理的環境 …… 21
　　歴史的環境 …… 22
Ⅱ　調査 …… 30
　　調査に至るまで …… 30
　　調査の概要 …… 31
　　墳丘の調査 …… 33
　　埋葬主体部の調査 …… 35
Ⅲ　まとめ …… 37
　——付—— …… 38

挿　図　目　次

第１図　岳崎古墳略位置図 …… 21
第２図　岳崎古墳の位置と周辺の地形 …… 23
第３図　宝ケ峯古墳群位置図 …… 25
第４図　岳ノ下古墳位置図 …… 26
第５図　勝負田古墳位置図 …… 26
第６図　湯牟田古墳位置図 …… 26
第７図　上骨棒古墳群位置図 …… 27
第８図　山田古墳位置図 …… 27
第９図　笠松天神社古墳位置図 …… 28
第10図　小嶋古墳群位置図 …… 29
第11図　岳崎古墳墳丘実測図 …… 30
第12図　岳崎古墳墳丘・試掘壙位置図 …… 32
第13図　岳崎古墳土層図 …… 34
第14図　岳崎古墳埋葬主体部実測図 …… 36

表 目 次

周辺遺跡一覧表 …… 22

図 版 目 次

図版 1　墳丘の状況 …… 47
図版 2　調査風景 …… 48
図版 3　埋葬主体部の出土状況と調査風景 …… 49
図版 4　葺石の状況 …… 50
図版 5　葺石の状況 …… 51
図版 6　裾部の状況 …… 52
図版 7　土層 …… 53
図版 8　土層 …… 54
図版 9　土層 …… 55
図版10　土層 …… 56
図版11　土層 …… 57
図版12　埋葬主体部蓋石の状況 …… 58
図版13　埋葬主体部の蓋石の細部 …… 59

Ⅰ　岳崎古墳の位置と歴史的環境

1　地理的環境

岳崎古墳は，長崎県の本土部をしめる北松浦半島の北端に近い，北松浦郡田平町岳崎にある。岳崎免128番地と129番地にかかり，東経129° 36′07″ 北緯33° 22′13″ の位置である。大体の場所を示せば，朝鮮半島南端から約200km，対馬南端から90km，壱岐からおよそ40km南側にあり，古く那之津と呼ばれた現在の博多港から西方に80kmほどに位置する。

古墳の周辺は北松玄武岩台地となっており，ゆるやかな台地の高所から望めば，壱岐水道を挟んで壱岐の島や佐賀県の馬渡島など，玄界灘西部の島々が見渡せる。古墳はこの丘陵の先端部分に位置し，標高20ｍほどあり，北側はそのまま海に没している。

第１図　岳崎古墳　略位置図

昭和62年度の長崎県重要遺跡基本資料によれば，「釜田漁港を見下ろす，岬の先端に位置している。

ほぼ東西に主軸を向ける，前方後円墳で，規模は，長さ60ｍ弱，後円部の高さ４ｍ，直径30ｍ程，前方部の高さ2.5ｍ，幅20ｍ程である。

調査や出土品の検出された例はない。

周囲には礫が，散在しており，フキ石の可能性も考えられる。

また，すぐ西側近くには，積石塚らしいものがある。」との記録がある。

現在は竹やヒノキ，マキノキなどが茂って墳丘を覆い，遠目には古墳の存在は気付かれにくくなっている。

2　歴史的環境

周辺の遺跡

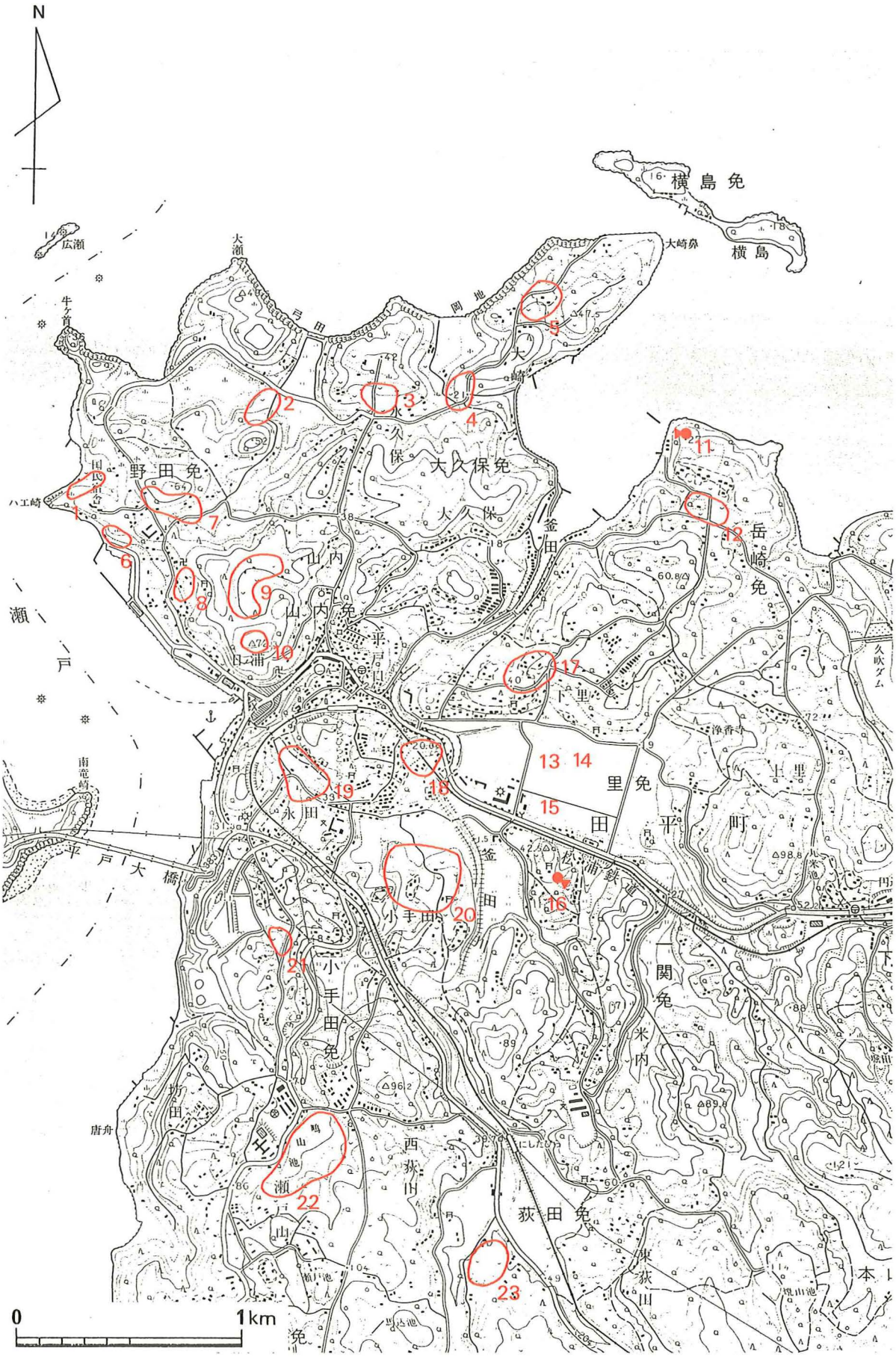
先土器時代の遺跡についてみると，日ノ岳遺跡以下が知られているが，発掘調査がなされ性格等について判明しているのは，日ノ岳遺跡のみであり，他の遺跡は遺物が表面採集されたというにとどまる。日ノ岳遺跡が位置する標高５～12ｍ という高さを除けば，他の遺跡は標高50ｍ前後から100ｍを越える付近まで位置している。このような遺跡のあり方については，地下水脈の湧水点との関係を指摘する見解もある。

次に縄文時代の遺跡であるが，他の時代と複合しているとはいえ，田平町内の遺跡のうち半数以上を占めている。なかでも６の，つぐめのはな遺跡や久吹浜遺跡，西海岸に位置する以善ケ浦遺跡などが知られている。これらはいずれも海岸に面した遺跡であるが，縄文時代でも晩期になると生活圏が内陸盆地にも移動・拡大し，里田原遺跡などへとつながり，発展したものと考えられる。

弥生時代の遺跡としては里田原遺跡や鳴山池遺跡，中野ノ辻遺跡などが知られている。里田原遺跡は釜田川の河口から上流約１㎞に広がる標高15ｍ～18ｍ，面積40ヘクタールほどの小盆地で，弥生時代前期からの遺跡である。旧河川やその間の微高地などが確認されている。旧河川や低湿地から多く

周辺遺跡一覧表

番号	名　称	所在地	種別	立地	時代
1	ハエ崎遺跡	野田免字ハエ崎	遺物包含地	丘陵	縄文
2	日ノ岳遺跡	大久保免字大池	〃	〃	先土器
3	中瀬遺跡	大久保免ヤブ田・中瀬	散布地	〃	〃
4	永久保遺跡	大久保免字永久保	〃	台地	縄文
5	大崎みやま遺跡	大久保免字田ノ頭・みやま	〃	丘陵	先・縄
6	つぐめの鼻遺跡	野田免字ハエ崎	遺物包含地	海岸・丘陵	縄文
7	野田遺跡	野田免字上野田	散布地	台地	先・縄
8	前目遺跡	山内免字前目	〃	〃	縄文
9	猿新田遺跡	山内免字猿新田	〃	〃	先・縄
10	陣笠城跡	日の浦免字城山	城跡	山頂	中世
11	**岳崎古墳**	**岳崎免字榎綱代**	**前方後円墳**	**台地**	**古墳**
12	岳崎遺跡	岳崎免字岳崎	散布地	丘陵	縄文
13	里田原遺跡	里免	遺物包含地	盆地	縄～奈
14	里田原条里跡	里免	条里遺構	平地	奈良
15	里田原支石墓	里免	墳墓	〃	縄・弥
16	笠松天神社古墳	小手田免字米ノ内	前方後円墳	丘陵	古墳
17	里城跡	里免字城	城跡	〃	中世
18	籠手田城跡	山内免字片宗・城山	〃	〃	〃
19	永田遺跡	山内免字馬場崎	散布地	丘陵	縄文
20	小手田遺跡	小手田免字椿崎	〃	台地	〃
21	坊田遺跡	小手田免字坊田	〃	丘陵	先・縄
22	鴨山池遺跡	小手田免字鴨山池	〃	台地	縄・弥
23	中野ノ辻遺跡	荻田免字中野ノ辻	墳墓	〃	弥生



第２図　岳崎古墳の位置と周辺の地形（S=1／25,000）

の木製品やその未製品が出土し，また朝鮮半島との交流を裏付ける支石墓も現地において見ることができる。鳴山池遺跡は縄文時代の遺物と混在しての散布地とされている。中野ノ辻遺跡は台地上の石棺墓群で，昭和55年，56年，平成３年に発掘調査が行われ，合計27基の石棺が調査されている。弥生時代から古墳時代にかけての墓地とされている。里田原遺跡の南方約２㎞の場所にあり，釜田川流域の小盆地を生活の場所とした人々の墓地が考えられる。

古墳時代の遺跡としては不明な点が多かったが，笠松天神社古墳や岳崎古墳が見つかり，しだいに明らかになりつつある。久吹浜遺跡や里田原遺跡などに須恵器や土師器の出土が知られ，古墳時代の遺跡の存在の可能性が考えられている。

奈良時代以降の遺跡としては，里田原遺跡の表面に地割りとして残る条里遺構のほかは，中世の遺跡に移り，陣笠城跡・里城跡・篭手田城跡などが知られているに過ぎない。

［参考文献］

『平戸学術調査報告』　京都大学平戸学術調査団　樋口隆康他　1951年
『つぐめのはな遺跡緊急調査概要』　長崎県文化課　1971年
『里田原遺跡』　長崎県教育委員会　1975年
『日ノ岳遺跡』　長崎県立美術博物館　1981年
『中野ノ辻遺跡　里田原遺跡』　田平町教育委員会　1982年
『中野ノ辻遺跡　里田原遺跡』　田平町教育委員会　1990年
『里田原遺跡』　田平町教育委員会　1985年
『笠松天神社古墳』　田平町教育委員会　田平町文化財調査報告書第４集　1989年
『長崎県遺跡地図』　長崎県教育委員会　長崎県文化財調査報告書第119集　1995年

周辺の島々の古墳

本土部に近い福島・鷹島・的山大島・度島・生月などの島々にも高塚式の古墳があるが，これらの島々が面する北松浦半島側にはあまり知られていない。それぞれの島における古墳の状況について，簡単に述べておきたい。

福島

福島は伊万里湾の奥に位置する島で，横島古墳などが知られているが，その実態については不明な点が多い。福島の南端から３㎞ほど南に佐賀県伊万里市の小島古墳がある。島に築かれた全長43ｍほどの前方後円墳で，南側に向いた横穴式石室をもつ。

鷹島

元寇で有名な鷹島は伊万里湾の入り口に位置し，北側は壱岐水道に面している。宝ケ峯古墳群は溶岩台地の丘陵部分にあり，遠く壱岐の島を見渡せる。古墳は３基が残り，横穴式石室が開口している。１号墳は丘陵の中ほど，標高20ｍほどにある円墳で，墳丘の直径は約９ｍである。墳丘には部分的に葺石が確認されている。

石室は西北西，海側に開口している。石室の全長4.6ｍで，玄室は若干ふくらんだ形を呈する。大きめの石を腰部に据え，その上に小形の石を持ち送りに積み上げる形である。

２号墳は１号墳の南の丘陵，標高約30ｍほどの場所にある。円墳と思われるが，畑の開墾の際に削られ，形や規模の確認は不可能な状態である。横穴式石室はほぼ南に開口し，玄室からやや斜め方向に羨道が付く。石室の大きさは，全長5.2ｍほどあり，玄室は方形に近い。下部に大きめの石材を据え，残りの半ばほどの高さを小形の石で築いている。

３号墳は２号墳の西，30ｍほどの，標高約30ｍの場所に位置する。横穴式石室の円墳であったと考えられているが，後世の掘削によって旧状を留めていない。石室は奥壁の一部を残すのみである。

宝ケ峯古墳群から出土した遺物はさほど多くはない。１号墳からはガラス製小玉，須恵器・土師器の破片などが出土している。２号墳からも須恵器などが出土しており，これらの遺物からいずれも６世紀の後半のものと考えられている。

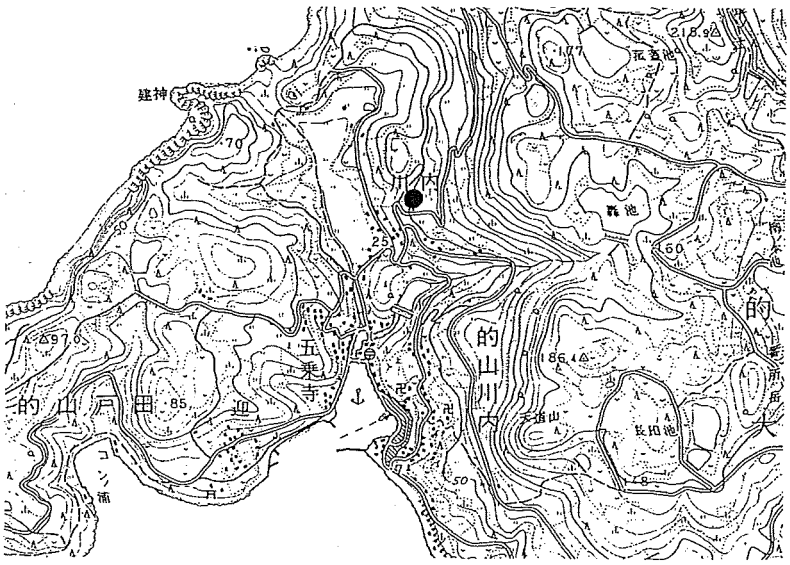
このほか鷹島では島の北側に薫崎鬼塚古墳が知られているが，形状や規模については不明な点が多い。７世紀の横穴式石室をもった円墳と考えられる。

第３図　宝ケ峯古墳群位置図

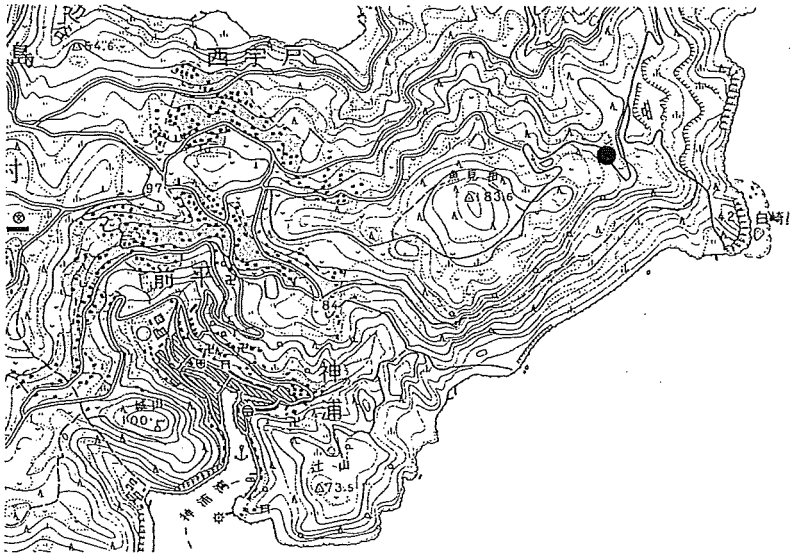
的山大島

的山大島に岳ノ下１号墳・２号墳が知られているが，旧状の変形が著しい。古墳のある場所は島の東部にある半島の高台で，北東に開いた大根坂湾と島の南岸を同時に見下ろすことができる。出土遺物として須恵器・土師器・鉄刀・鉄鏃・金環などがある。

勝負田古墳も的山大島にあり，現在は墓地となっていて旧状は全く残っていない。昭和16年か17年ころ，４枚の板石を長方形に組み合わせた石棺と思われるものが出土し，中から鏡１，勾玉３個などが出土したと伝えられている。鏡は内行花文鏡で，壊れているが直径13.8cmくらいのものと推測されている。「小」「孫」の二字は明らかで「長宜子孫」銘の中国製のものと考えられている。



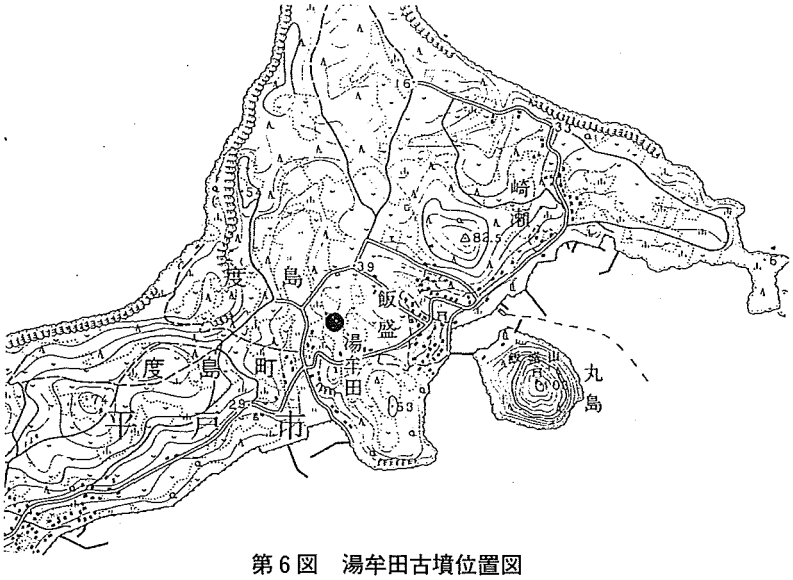
第４図　岳ノ下古墳位置図



第５図　勝負田古墳位置図

度島

度島は平戸島の北部，大島との間に位置する。玄武岩溶岩に覆われた島で，湯牟田古墳はこの比較的平坦な丘陵上に営まれている。石室は2.1ｍ×　1.65ｍほどの大きさで，天井石は失われていた。床面に砂利層があり，その上に板状の石が敷かれていた。副葬品は石室の南隅に須恵器，南西壁に沿って土師器



第６図　湯牟田古墳位置図

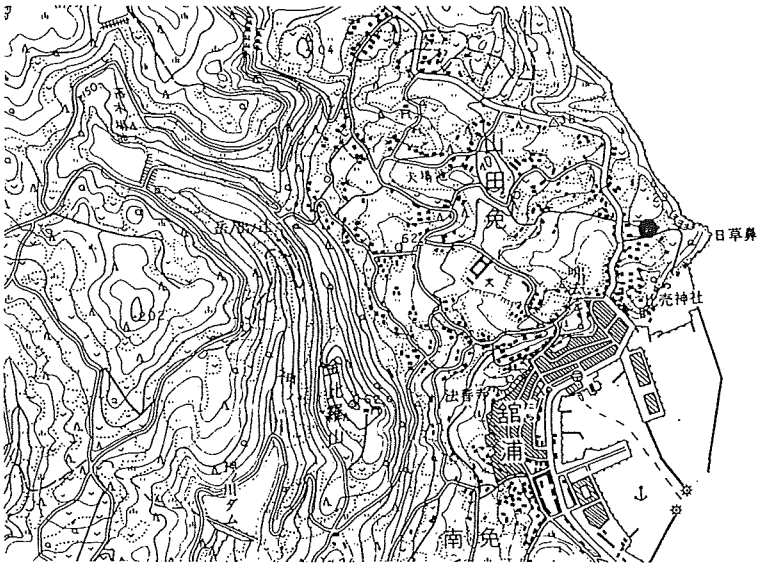
が並び，中央近くに丸玉が多数散乱していた。出土した須恵器は坏身・坏蓋・壷・提瓶などであり，土師器には坏身・坏蓋・壷などがある。暗紫色で直径7～9㎜ほどの丸玉は，床面および床の板石の間から約120個が検出されている。副葬品の出土状況などから，二度の埋葬がなされた可能性が指摘されている。度島にはこのほか飯盛第1号墳・同第2号墳・山口古墳・壱銭替古墳・竪山古墳・崎瀬古墳などが確認されている。

生月島

生月島は平戸島の北西にあり東西4㎞，南北10㎞ほどの大きさの島である。島は玄武岩溶岩によって覆われ，東側は比較的緩やかな傾斜地となって集落が形成されている。これに対し西海岸は切り立った海食崖が続き，玄武岩の溶岩流の露出が見られ，島の北西部の塩俵海岸に露出する玄武岩の柱状節理はその代表的なものである。

上骨棒古墳群は館浦・一部間の標高110ｍほどの小台地上に位置する。以前は5基の古墳からなっていたと伝えられている。昭和22(1947)年にこのうちの1基が壊され，石室が確認されている。石室は四壁に一枚石を立て，その中に多数の土器類が確

第7図　上骨棒古墳群位置図



第8図　山田古墳位置図

認されたという。石室の構造は腰部に大きめの石を据え，その上部は小形の石材を積むというこの地域に例の多いものと推測されている。

出土の遺物は須恵器が多く，坏身・坏蓋・高坏・壷・横瓶などである。他に鉄矛などが出土したらしいが，その大部分は所在がわからない。出土の遺物から，いずれも７世紀の群集墳と考えられる。上骨棒古墳群から南東約1.5㎞の，日草鼻の付け根部に山田古墳がある。現在は富永家の庭で，築山として利用されており富永古墳とも呼ばれている。昭和25（1950）年，京都大学平戸学術調査団によって石室の実測などがなされた。西に開口する横穴式石室である。構造的には大島村の岳ノ下２号墳に似る。石室は長方形で，大きさは長さ2.6ｍ，幅1.7ｍほどである。

本土部の古墳

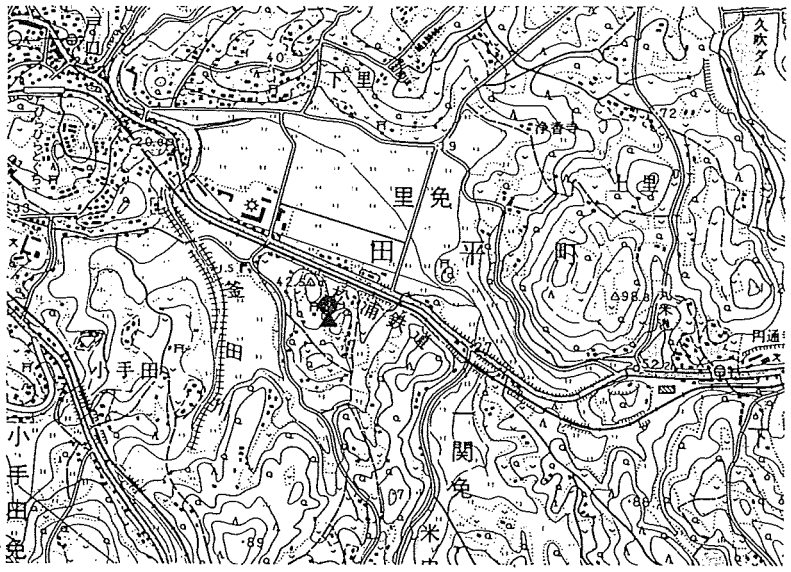
笠松天神社古墳は弥生時代以来の遺跡，里田原遺跡のすぐ南の台地上に築かれている。標高およそ34ｍほどの場所である。

昭和50（1975）年に前方後円墳であろうことが知られ，翌昭和51年に墳丘の測量が行われた。

その結果，南東から北西に向く前方後円墳で，現在の長さ約34ｍ，後円部の直径約22ｍ，高さ約2.5ｍ，前方部の幅約15ｍであることが知られた。

昭和63年，田平町教育委員会による発掘調査が行われ，埋葬主体部やくびれ部の確認がなされた。

この調査では，後円部のほぼ中央に板石の集中する部分があり，かつて盗掘があったことが窺われた。板石の状況から，埋葬施設としては竪穴式石室か石棺系統のものである可能性が考えられた。墳丘は，前方部分が「ばち」状に広がるように観察されることから，前方後円墳でも古式のものと思われ，５世紀中ころ以前のものであろうと推測されている。



第９図　笠松天神社古墳位置図

小嶋古墳群

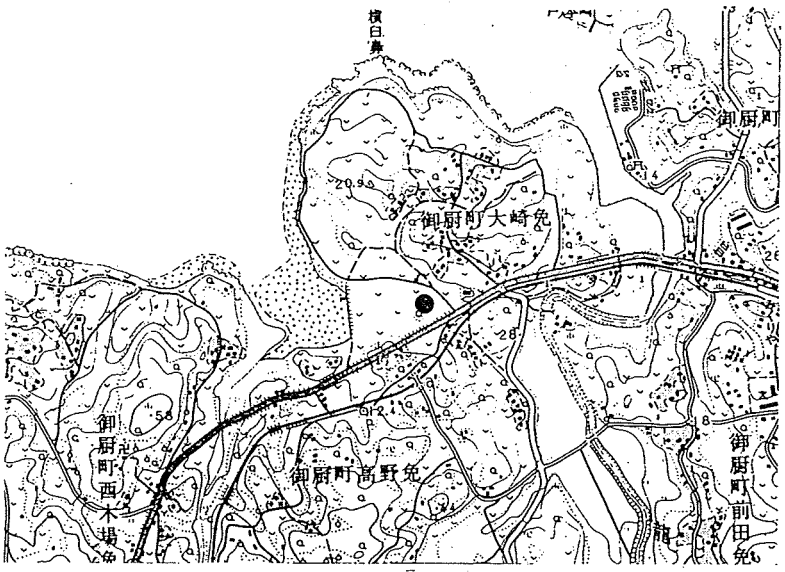
小嶋古墳群は松浦市の西部，伊万里湾の入り口に面する海岸に位置する。松浦市は伊万里湾に面し，間近に鷹島や福島などの島々を望みうる。市域の基盤である第三紀層の上を玄武岩溶岩が覆い，各所に玄武岩台地が認められる。

小嶋古墳群は３基からなり，市の西にあたる御厨町の海岸に位置する。江戸時代末期に干拓された浜中の小さな丘の上で，標高６ｍほどの島の中央部には現在薬師堂が建てられている。

この古墳群は昭和40年代に見つかり，昭和62(1987)年に松浦市教育委員会により発掘調査が行われ

ている。３基とも盛り土をなくしており，規模・形状については判然としない。

１号墳は小嶋の東側に位置し，標高６ｍほどの場所にある。南東に向いて開口し，腰石と袖石が残っている。残存する石室の長さは5.2ｍで，玄室の長さは約1.5ｍ，幅は奥壁の部分で2.3ｍ，玄室入り口で1.4ｍある。床面には拳ほどの大きさの礫を敷いている。出土の遺物は銀環・碧玉製勾玉・碧玉製丸玉・滑石製丸玉・ガラス製丸玉・鉄鏃・鞘尻金具・鍔・鉄刀・須恵器などである。１号墳が築造されたのは７世紀後半代と考えられている。



第10図　小嶋古墳群位置図

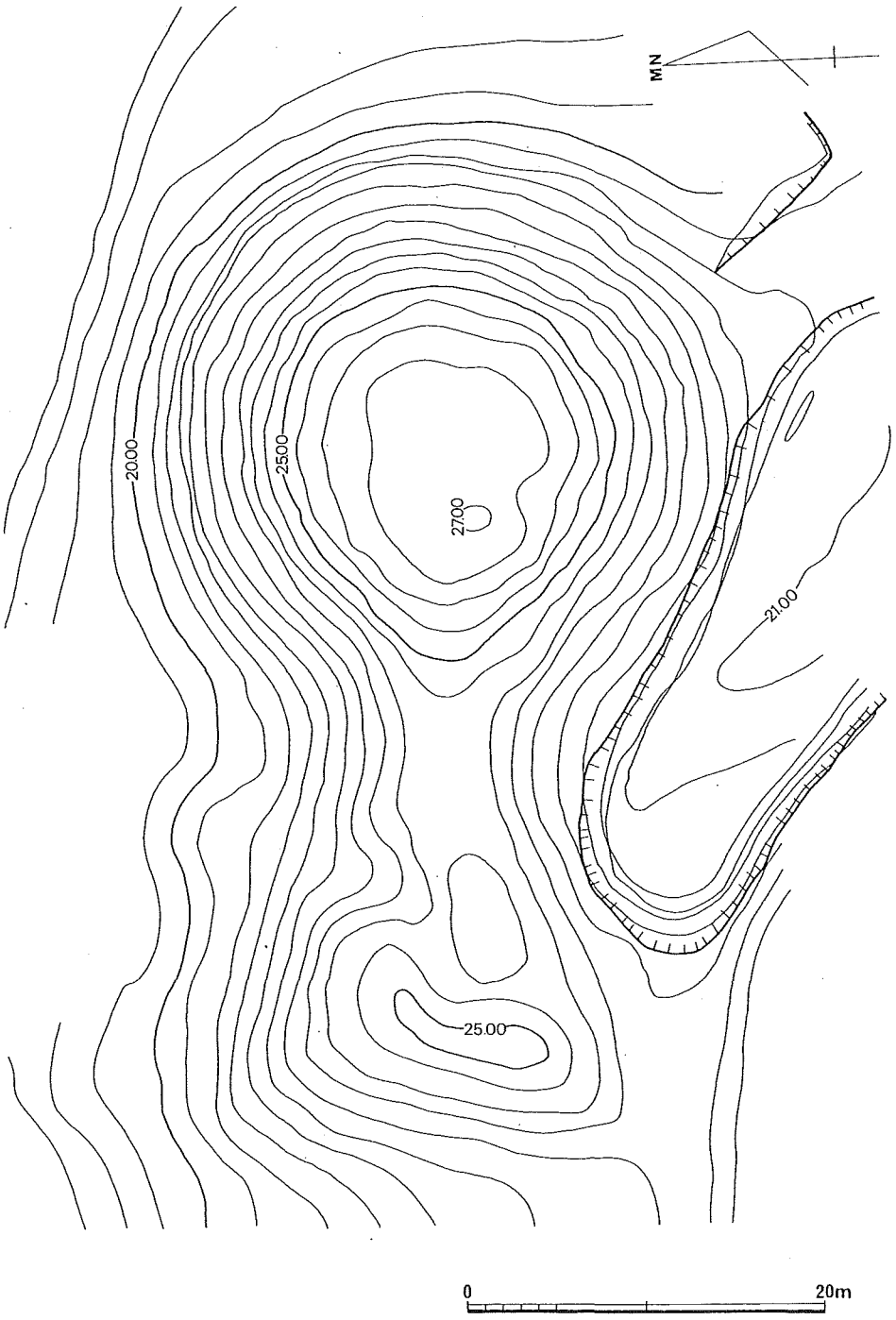
壱岐水道に面した，これらの島々に小形の高塚式の古墳が出現するのは，朝鮮半島に対して関心をもつ中央政権の支配下に組み込まれたからと考えられる。人員や物資の集積に貢献し，後に島々の支配層となっていった被葬者の残したのが高塚式の古墳であろう。これらの古墳と岳崎古墳との関係などについては後述したい。

［参考文献］
『平戸学術調査報告』　京都大学平戸学術調査団　樋口隆康他　1951年
『笠松天神社古墳』　田平町教育委員会　田平町文化財調査報告書第４集　1989年
『長崎県遺跡地図』　長崎県教育委員会　長崎県文化財調査報告書第119集　1995年

Ⅲ　調査

調査に至るまで

田平町の岳崎地区に前方後円墳らしい大形の古墳がある，という話しがあり，昭和55年には町教育委員会へ地元の住民から通知があっていた。このため県文化課でも下見をしてその存在については確認がなされていた。長崎県重要遺跡としても取り上げられ，昭和62年10月作成の資料にも以下のような記録がある。「主軸をほぼ東西に向け，全長60ｍ弱，後円部の高さ４ｍ，直径30ｍ，前方部の高さ2.5ｍ，幅20ｍほど」の前方後円墳である，と。



第11図　岳崎古墳　墳丘実測図（1／400）

長崎県内，特に本土部の北松浦郡地域にはほとんど知られていない前方後円墳であるところから，できるだけ正確な規模・築造の時代・埋葬主体部の確認を目的とし，平成９年度に発掘調査を実施することになったものである。

墳丘については，長崎県文化財調査報告書　第106集　県内古墳詳細分布調査報告書　1992年に，以下のように報告されている。

「本古墳は，昭和55年に発見されるまで，古墳が在ることは田平町郷土誌に記載されていたが，場所，形状，規模および所在も不明で確認出来ていなかったものである。現状は雑木と竹林に覆われ，墳丘の前方部の一部分が最近海岸へ下る通路として，掘削を受けている以外はほぼ原形の姿を留めているようである。

墳丘は，主軸がN-96°-Eの方向で，ほぼ東西に横たわる前方後円墳である。墳丘の北側は，海岸へ急激に傾斜し，南側は丘陵部分を掘削した痕跡が窺われ，この土を利用して築いたものと考えられる。後円部の東南側の墳丘裾部に接して，幅６ｍ×長さ10ｍ程の道路状構造が見られ，その先は幅１ｍ程の小径となり，海岸へ下る通路となっている。この構造は，墳丘上のほぼ全面に拳大から人頭大位の礫石を利用した葺石で覆われていることから，この葺石に使用する石材を運び上げる時に使用したものと推測される。

墳丘の規模は，全長56ｍ程である。後円部の直径は33ｍ程で，高さ6.5ｍを計る。前方部は，長さ25ｍ，幅25ｍと等しく，高さ２～4.5ｍ程である。くびれ部分の幅は，15ｍで高さ1.5～３ｍを計る。前方部と後円部の比高差は，２ｍ程である。

石室は，未開口であるので規模，内部構造等については不明である。

築造時期については，遺物の出土もなく，また埋葬施設が確認されていない現状において，詳細には不明である。」　（同報告書56ページ）

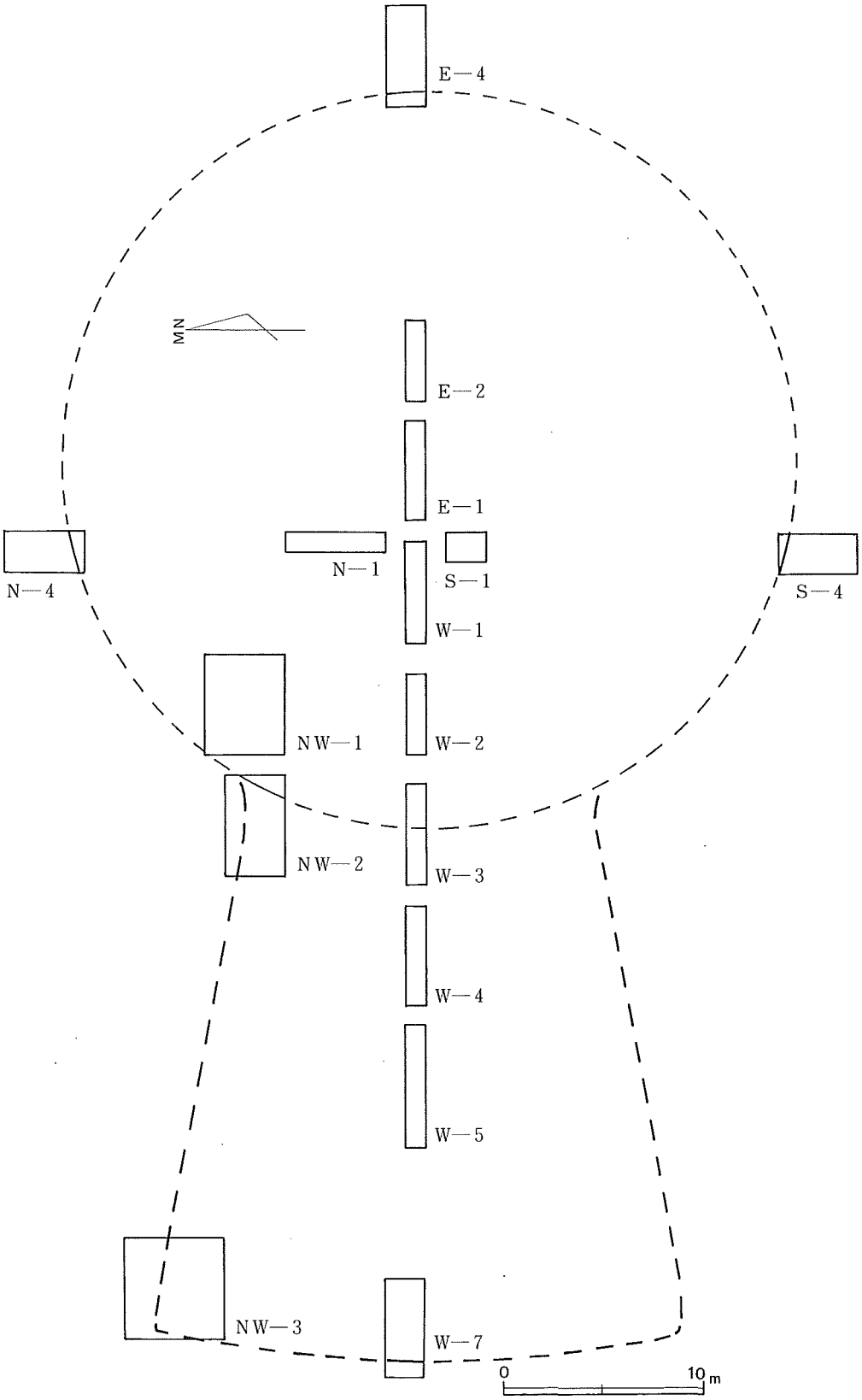
この時点での調査は単に墳丘の測量のみであり，墳丘裾部の確認はなされておらず，葺石等の状況も現況外面からの視認にとどまるものであった。今回の調査のように，一部ではあるものの発掘調査を実施しての規模の確認との差が生じるに至ったのは当然の帰結であろう。

調査の概要

平成９年度の調査について，概略を述べると以下のとおりである。おおむね週ごとに述べる。

９月29日　長崎市から現地に調査器材等を運び，田平町教育委員会へ挨拶。午後，調査に必要な部分の伐採にかかる。後円部の中心点から東西南北方向への基点を設ける。後円部中心から1･2･3･･･の順に，方向はＮ・Ｅ・Ｓ・Ｗで各試掘壙の名称とする。N-1・E-1・W-1の掘り下げにかかる。同時にW列の２～４，Ｅ列・Ｎ列の２の試掘壙を設定する。

10月６日から10月10日の週は，先週に引き続いて掘り下げを行う。E-1試掘壙はそばにシイの木があり，根をしっかりとはっていて作業がはかどらない。Ｎ・Ｗの１列はいったん掘下げをとめ，W-3･4試掘壙の掘り下げにかかる。ＮW-1･2･3の試掘壙を設定し，葺石の状況の確認にかかる。ＮW-2試掘



第12図　墳丘・試掘壙位置図

壙のある場所は，近年通路として削られ，葺石は少ない。W-5·6·7試掘壙を設定しW-5とW-7試掘壙の掘り下げにかかる。W-6·7間は通路として使われたもののようで，墳丘の背稜部にへこみが認められる。

10月13日から17日にかけても先週の作業の続きを行う。W-2・S-1試掘壙も掘り下げにかかる。E-1・S-1試掘壙から板石の一部と青灰色の粘土が出土しはじめる。E-1試掘壙では中心点から東に2.3mほどの場所から板石4枚が出土し，この状況での写真撮影を行う。

10月27日から31日　W-1～W-5試掘壙，E-1試掘壙の清掃と土層の写真撮影。E-1試掘壙は南側に拡張して掘り下げにかかる。W-2·3試掘壙の土層実測など。この週は各試掘壙の清掃と写真撮影など。

11月4日から11月7日にかけてはS-1試掘壙拡張部の部分的な掘り下げ，W-1·2，E-2試掘壙などの土層実測を行う。また，W-2·3·4，NW-1，3試掘壙などの埋め戻しにかかる。E-1試掘壙は割り付けを行い平面実測にかかる。平面図のあと最上部の板石を移動させるが，さらに下部に板石があって作業が進められない。この週は次週の引き上げに備えての埋め戻し作業が多くなった。

11月10日から14日　S・E・Nの4試掘壙，壁面の写真撮影終了後レベル移動，土層実測。直ちに埋め戻しにかかる。E-1試掘壙は青灰色の粘土による目張りのあと埋め戻し。地中探査を行う。
14日，各試掘壙の埋め戻し状況点検，現場の手直しなどのあと世話になった諸方に挨拶。夕刻長崎へ。

墳丘の調査

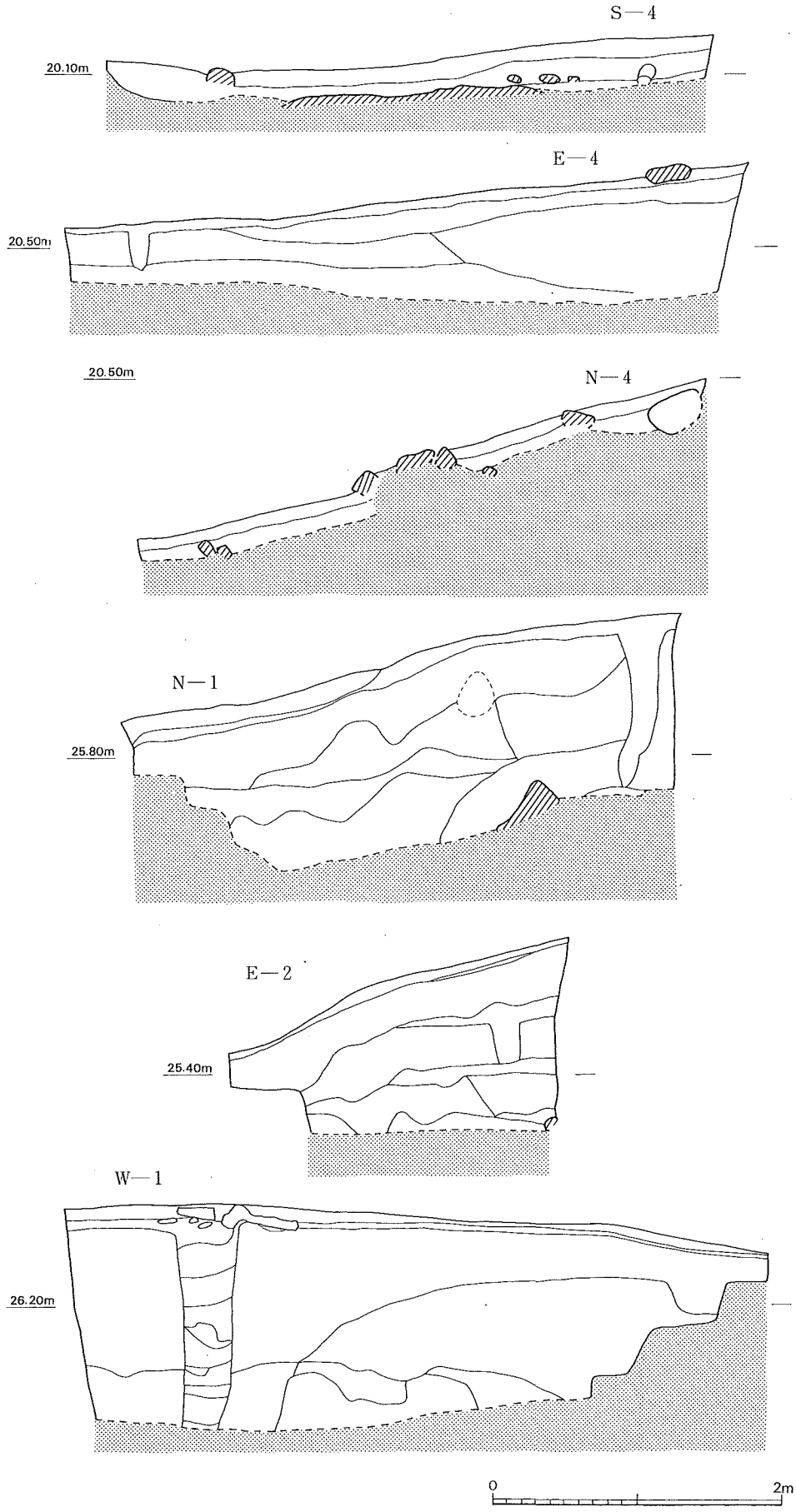
次に，各試掘壙の調査結果について述べ，規模の確認に至った状況について記しておきたい。墳丘における各試掘壙の名称については，墳丘の主軸がほぼ東西方向であることから，東西南北の頭文字を利用して付けた。（第12図）ここでの地山は北松玄武岩層を覆う，赤褐色の粘質土層であるが，部分的には黄褐色の粘質土層も混じっている。

W列，E列は墳丘を東西に切る試掘壙で，前方部と後円部の規模，古墳の全長の確認のために設けた。これにより後円部と前方部の接点は，後円部の中心点から約18mの場所にあり，前方後円墳の最高点は同じく27mの場所であることが判明した。前方部の葺石は後円部の中心点から13m付近から始まるものの，墳丘背稜部のありようについては明確ではない。これは前方部の大きさに比べ，各試掘壙の規模が弱小であった感も否めない。このことについては，前方部への何らかの施設の有無についての確認がなされなかった点も同様のことがいえる。前方部の西端は葺石の状況などから，中心点から約42mの場所が考えられる。

土層

各試掘壙の土層の状況については第13図のとおりである。基本的には地山と盛り土である。N・E・S列の調査で現標高20m強に整えられているが，W列では若干高い。おおよその整形のあとで築造されたことが窺われる。

盛り土の状況は墳丘の上部では複雑で，ここではW-1試掘壙の状況について述べておく。1層は表土層で，腐葉土層であるが，締まりはわりとある。そのすぐ下に指先大の小さな円礫があり，時代的



第13図　岳崎古墳土層図

には判然としないが，墳丘上に祠などの施設があり，参道のように使用された時期があったことも推測される。3層はにぶい赤褐色で締まりは強い。黄褐色の灰色の固まりが含まれている。4層は締まりが極端に強く，他層に比べて赤味が強く，また鮮やかである。5層は3層によく似ているが締まりがやや弱い。黄褐色の固まりを多く含んでいる。6層は4層と7層が混じりあった層と考えられる。7層は黄褐色土が基本となる層で，灰褐色の固まりが混じる。3・4層に似た赤い土も混じっている。礫は全く含まれていない。

埋葬主体部の調査

以下，後円部に見つかった埋葬主体部について述べる。

当初，墳丘の中心と考えられる部分に埋葬主体部があるものと考え，掘り下げを続けたが，それらしいものに行き着かず，土層の状況からも不思議な感があった。その後，さらに掘り下げたところ板石に当たり，その周辺に青灰色の粘土が出土しはじめ，埋葬主体部の存在に確信をもつにいたった。板石と周辺の粘土の広がりを追いかけたところ，想像以上の大きさと数の板石が表れた。試掘壙が狭く，北側に拡張したところさらに規模が大きくなりはじめ，若干の方向をずらした石棺が2基埋葬されているものととらえられた。

さらに調査をすすめたところ，とびとびに出ていた板石が，粘土を除けた段階になって同一の石材であることなどが判明し，非常に広い板石が使用されていることがわかった。これらの板石の一部は南北の壁にまだ続いているものもあり，南側にもその大きさの確認のため拡張した。ただこの調査での排土は墳丘の上のみに溜める予定であり，その場所が非常に限られていたため，試掘壙の周辺に土嚢を築いて土を置かざるをえず，作業が大層困難になったのも事実である。時間的にも余裕がなくなり，一応の区切りの着く時期を見計らって調査を次の機会に譲ることに決定せざるを得なかった。

調査では標高25.5m付近から板石の上部が出土しはじめた。現墳丘の表面から約1.5mほど掘り下げた場所である。青灰色の粘土は質の良いもので，量的にも多く，板石間の目張りとしてはかなり立派なものと思われた。この粘土に包まれるように出土した板石は，大形のもので縦約1.5m，幅は0.85mほどあり，厚さは10数cmにおよぶものである。全ての板石が砂岩で，このての種類の石は，平戸島と度島との間の横島と呼ばれる小島に参するとのことである。

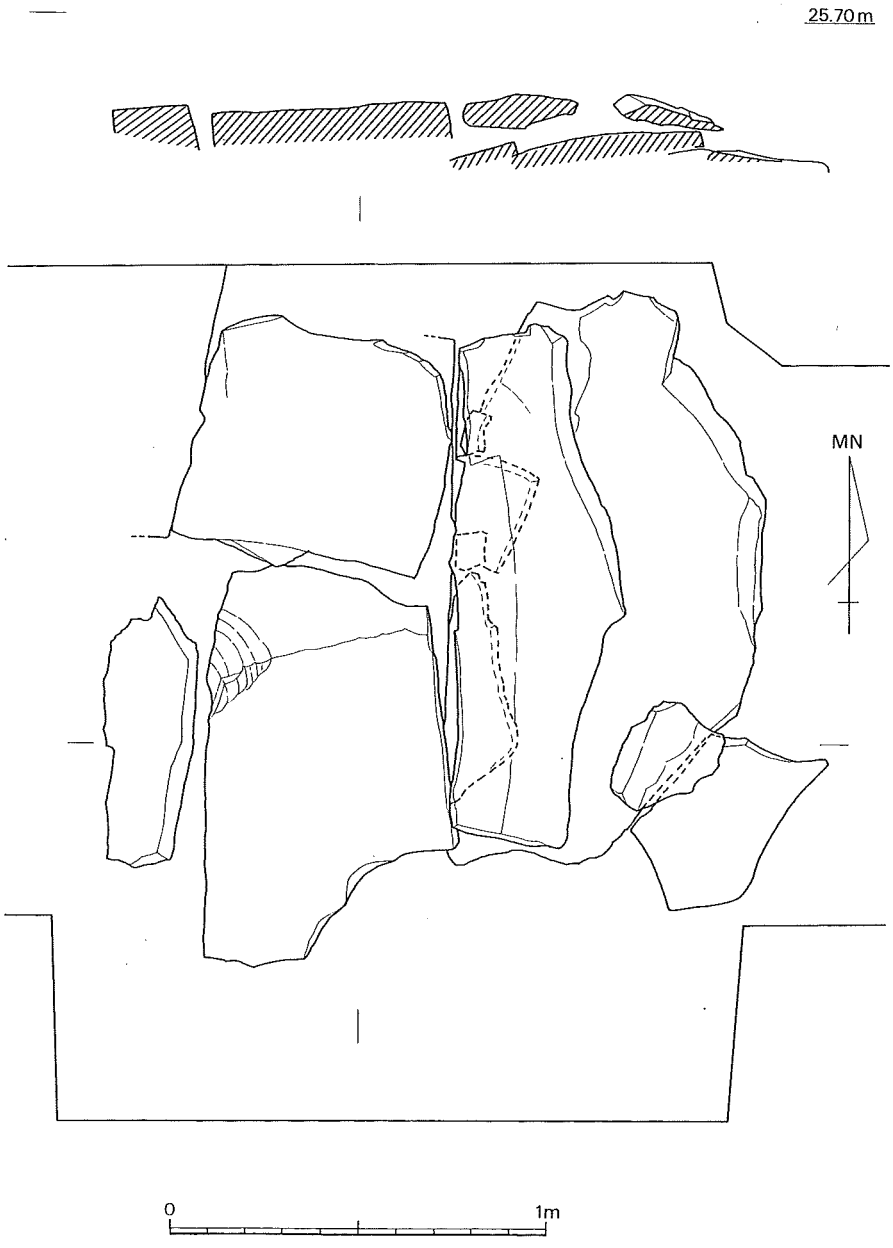
板石は向きを南北に向けているものが多いところから，墳丘と平行する埋葬主体部であることが推測される。それも，単に1枚ずつ置いただけの構造ではなく，2枚，あるいは小破片での塞ぎの石を含めると3枚以上にも重なるように観察された。これによっても，埋葬主体部は1基の可能性が強くなり，またその設備の大掛かりなことや作りの丁寧なことが判明した。

現在，確認した平面的な広がりは東西約1.7m，南北約1.5mであり，これが石室あるいは石棺の蓋石だとすると，その厚さは20cm以上ということになる。

これについては，その下部に空間（空洞）があることが確認されており，平面的な規模の大きさから石室の可能性が強い。

今後の石室の調査にあたっては，作業用の平面はいうに及ばず，これらの石材の取扱いについての十分な場所の確保を考える必要性を強く感じた。

この埋葬主体部と考えられる施設の他に，S-1試掘壙の東側においても大きな板石の存在を確認している。これについては，今回の調査では全く手を触れておらず，埋葬主体部であるのか，または埋葬に関係する別の施設の一部であるかの確信はない。これも砂岩で現在出土している石の大きさは，南北1.3m以上，東西0.7m以上で，その上部にわずかにもう1枚の板石の存在が確認されている。副葬品のみのための施設の可能性も考えられる。



第14図　埋葬主体部　実測図

Ⅲ　まとめ

今回の調査では以下のことを知り得た。

1　岳崎古墳の築造された場所は北松玄武岩台地の先端部で，壱岐水道に面していること。

2　海岸に近く，主軸をほぼ東西に向け，海岸に平行して築かれている。

3　地山をほぼ水平に整形したあと築いている。

4　墳丘の全長・後円部径・前方部の幅などが２６に関係ありそうなこと。

5　後円部中心に少なくとも複数の埋葬主体部らしい設備があること。

6　埋葬主体部の蓋石には大きめの板石を使用し，その下に空間があること。

7　盟主的な前方後円墳はこの古墳のみに限られ，その後は権力が周辺の島々に分散すること。

これらのことについて，若干付け足しておきたい。

1　は弥生時代からの生産基盤によらない権力者の台頭を意味し，よって立つところが海であることを示すものであろう。そしてその出現の時期は中央政権の半島への意識が大きくなる時と機を同じくするものではないか。

2　古手の前方後円墳が丘陵の自然形態を利用して築造する場合，海からの眺望を考え，その雄大さを示すために向きを考えた。

3　４と合わせると，ある程度の設計様式があったことが窺える。中央から隔った古墳にしては形が整っているように見受けられる。

4　後円部＝0.26×150　　39ｍ
　後円部上平坦面＝0.26×50　13ｍ
　前方部幅＝0.26×100　　26ｍ
　全長＝要検討

5　埋葬主体部と副葬品用の施設も併設されているかは不明。

6　今回はＮＴＴ―ＴＥ九州の協力を得，地下の空洞についてが判明したが，今後の調査での活用についても考える必要があろう。

7　現在までに周辺には前方後円墳の存在が知られておらず，岳崎古墳の次の世代までの権力の踏襲についてはどうであろうか。　周辺の島々の首長層に小権力として分散したものか。

このことについては，海を隔てた壱岐の島での巨石墳との関係で検討の必要を感じている→中央政権の，対朝鮮半島へのルートが一元化していったのではないか→北松地域の権力基盤の衰弱化。

今回の調査で知り得たことは，おおまか以上のようにまとめられる。ただ欲をいえば肝心の部分に触れていないことであろう。万全の準備のもとに，岳崎古墳の権勢の状況を知りたいものである。

——付——

岳崎古墳埋葬主体部の地中探査について

岳崎古墳の後円部に，石室あるいは石棺らしいものの蓋石が検出されたあと，時間的に今後の調査が難しくなり，埋葬主体部の確認についての方法についての話が持ち上がった。その際，何らかの科学的方法は無いものかということとなり，地中レーダーによる探査が考えられた。この件について，ＮＴＴ—ＴＥ九州に話がゆき，現地での調査が実現の運びとなった。以下，ごく簡単に紹介する。

11月12日に現地に機械が運ばれ，埋葬主体部の上部から探査が実施された。①から⑧にかけての走行で得られた知見について述べる。

①はＳ-1試掘壙の東から西にかけてで東側の一部に蓋石らしいものがあり，地表から1.2ｍから1.5ｍにかけて空洞を示す反応がある。

②から④は埋葬主体部の真上で，西から東に北側を②，中心部分を③，南側を④として走査されたものである。②では蓋石上から1.2ｍ，③でも1.2ｍ，④で0.7ｍ付近までに空間らしい部分が認められる。⑤は埋葬主体部の東側を北から南へ移動し，0.7ｍ付近まで，⑥は埋葬主体部の西側を同じく北から南へ移動し0.9ｍほどまでの空間らしいものの様子がとらえられている。⑦はＮ-1試掘壙の部分に，⑧はＥ-1試掘壙南側での走査結果であるが，いずれにも空洞の存在を思わせるような状況は認められていない。

以上の調査の結果からみると，蓋石と考えられる板石の上部を走査した場合に顕著な空間の存在を示す反応が表れている。特に③の埋葬主体部の中心部と考えられる部分は明瞭で，石棺にしては深すぎ，面的に断言できないが，石室である可能性が大きい。時間的な余裕があればより一層明確な結果が得られるものと信じている。今後の調査に期待するところが大きい。

このような機会を与えて下さったＮＴＴ—ＴＥ九州長崎支店の片町正行氏・佐世保営業所の松本友二両氏には大層お世話になった。おおいに感謝するものである。

最後になったが，今回の調査では多くの方々のご協力を頂き，お世話になった。調査の担当者としては，この岳崎古墳の築造方法・時代，被葬者など，まだまだ知りたいことが多く残ってしまったのが非常に残念でならない。しかし，後日，より一層の覚悟で調査にかかれることを期待し，一応の締めくくりとしておきたい。

地権者の方や岳崎地区の皆様，また田平町教育委員会の方々など本当にありがとうございました。

図　　版

図版1

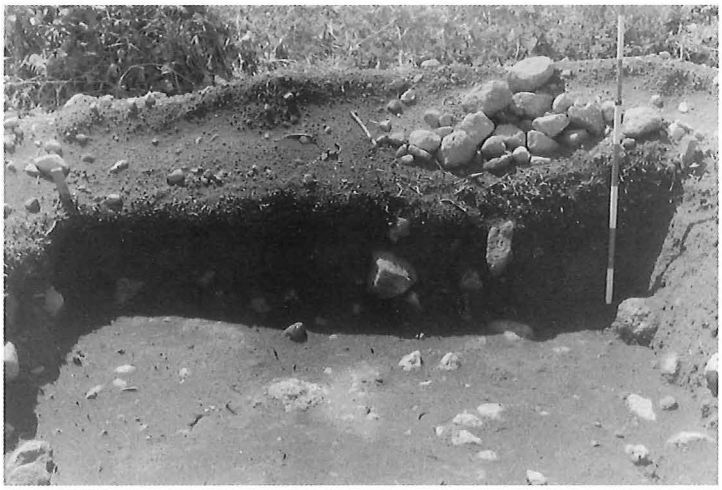
1グリッド調査風景（南方より）

21グリッド調査風景
（竹林を切り開いた所に設定）

23グリッド土器出土状況

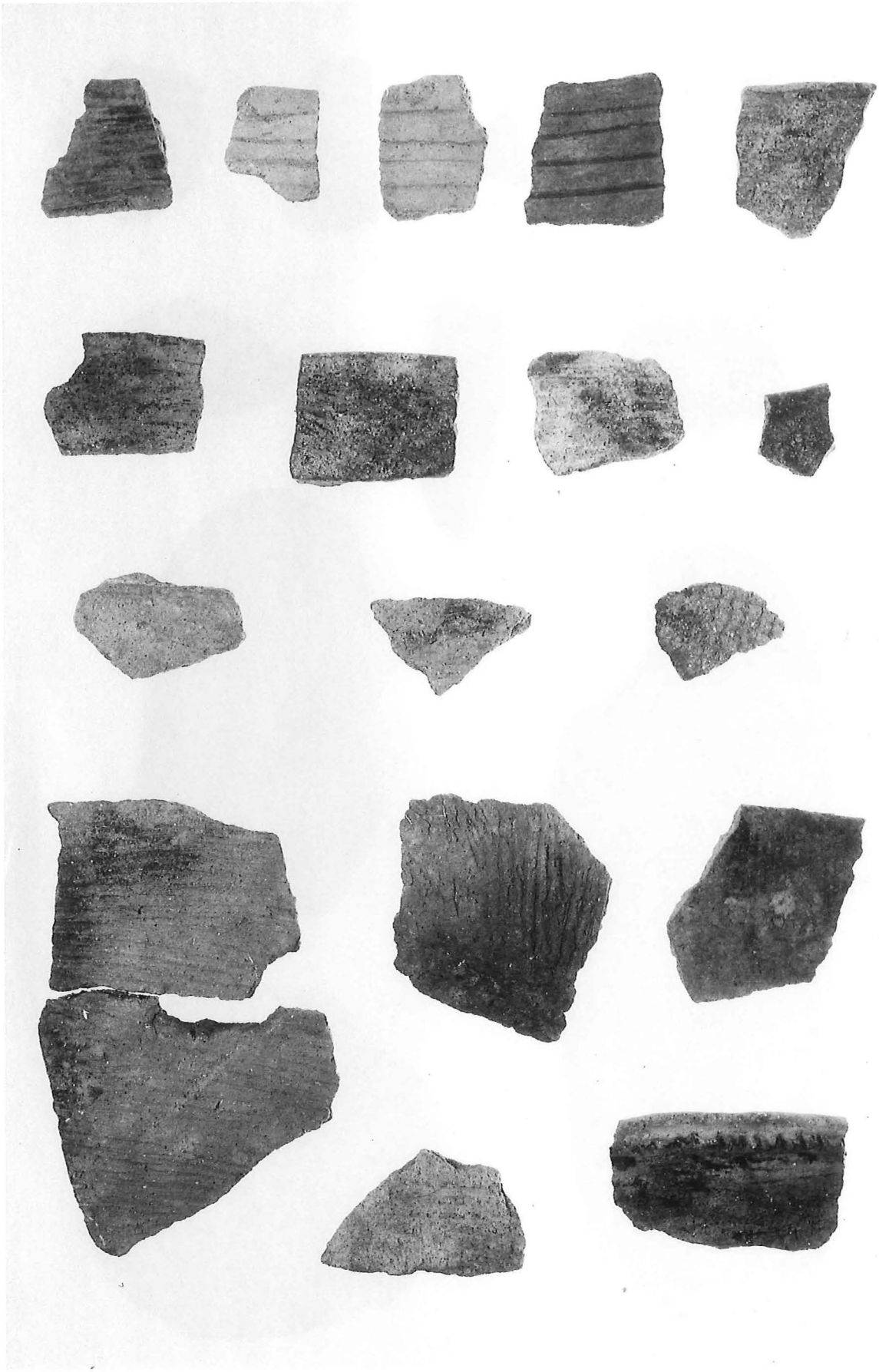
図版2

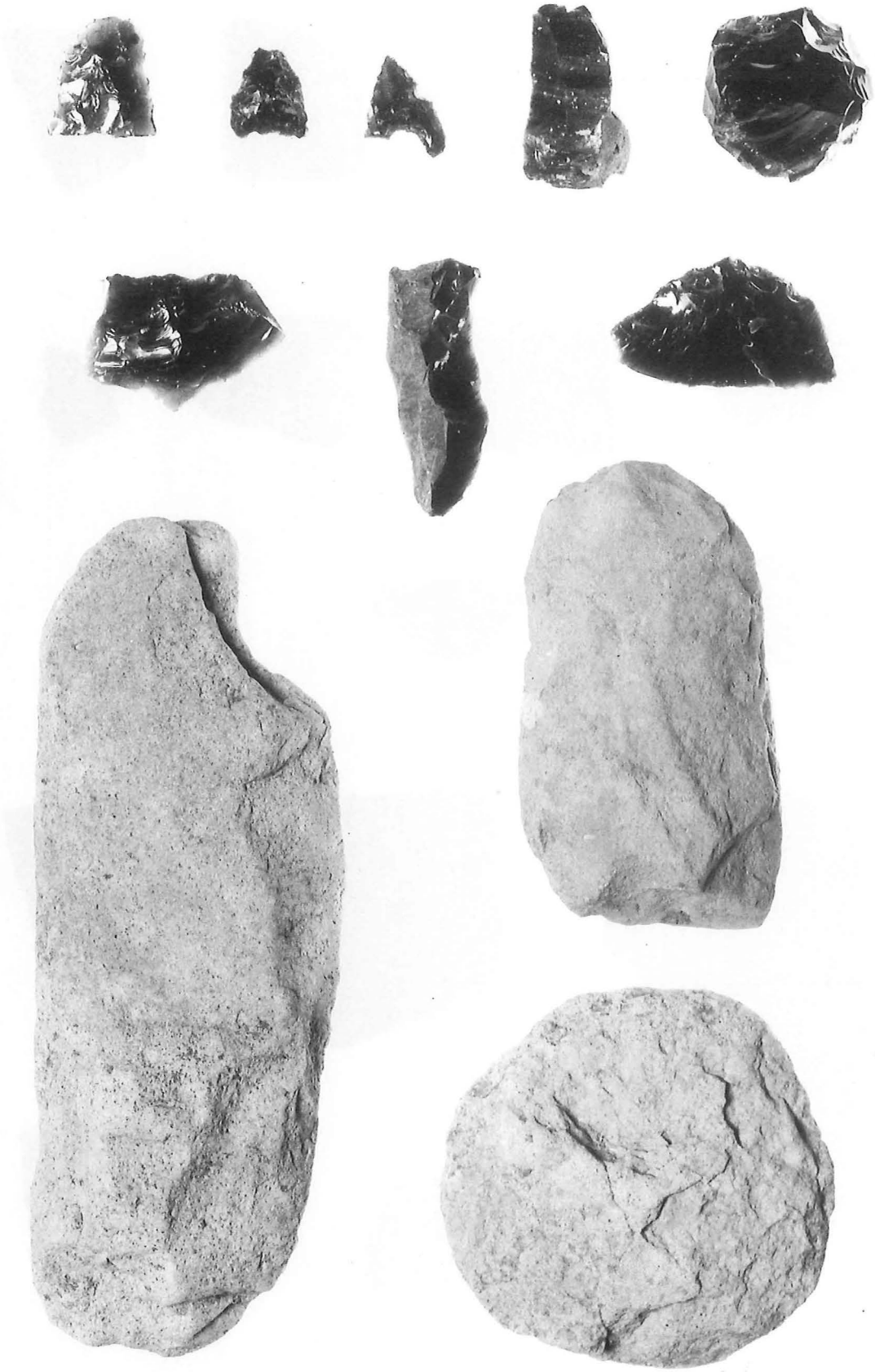
7グリッド扁平打製石斧出土状況



6グリッド完状況

21グリッド北壁状況





写　　真

図版1

前方部から後円部を見る

後円部から前方部を見る

墳丘の状況

図版 2

埋葬主体部の調査

後円部の状況

地中レーダーでの
調査

調査風景

E-1での板石出土状況

S-1での板石出土状況

地中レーダーでの調査

埋葬主体部の出土状況と調査風景

図版 4

W-7　葺石の状況

W-7　墳丘裾部

ＮＷ-1　葺石の状況

ＮＷ-3　墳丘裾部の状況

図版 6

NW-2　東壁の状況

NW-2　南壁の状況

土層の状況

図版 8

土層の状況

墳丘への掘り込みの状況

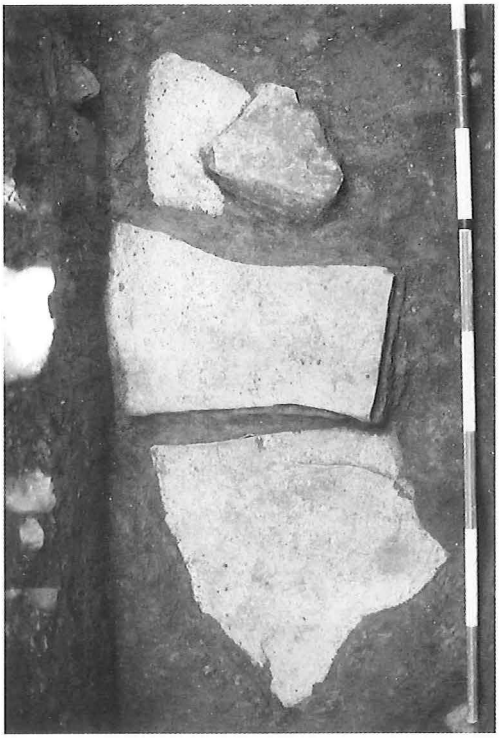
土層の状況

図版10

土層の状況

土層の状況

図版12



埋葬主体部蓋石の状況

埋葬主体部の蓋石の細部

報告書抄録

ふりがな	けんないしゅうよういせきないようかくにんちょうさほうこくしょ
書名	県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅱ
副書名	
巻次	Ⅱ
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第１５１集
編著者名	藤田和裕・福田一志
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850-0861　長崎県長崎市江戸町2-13　TEL 095-824-1111
発行年月日	西暦　1999年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
たけざきこふん 岳崎古墳	きたまつうらぐんたびら 北松浦郡田平町 たけざきめん 岳崎免	42385	11	33° 22' 13"	129° 36' 07"	1997929 ～ 19971114	210㎡	主要遺跡 内容確認 調査
やまのてらかじきいせき 山の寺梶木遺跡	みんみたかぎぐんふかえ 南高来郡深江町 たなかみょうあざ 田中名字山の寺	42376	5	32° 46' 09"	130° 16' 10"	19970809 ～ 19971002	117㎡	主要遺跡 内容確認 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岳崎古墳	古墳	古墳時代	石室か石棺		ほぼ完全な形の前方後円墳
山の寺梶木遺跡	包含地	縄文晩期		土器・石斧 石鏃	

長崎県文化財調査報告書　第151集

主要遺跡内容確認調査報告書　Ⅱ

平成11年３月31日

発　　行　　長崎県教育委員会

長崎市江戸町2-13

印　　刷　　(有) 康真堂印刷

大村市原町467-12